

## 基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	学部の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン アジアカクエン 学校法人 亜細亜学園									
フリガナ大学の名称	アジアダイガク 亜細亜大学									
大学本部の位置	東京都武蔵野市境5丁目8番									
大学の目的	広く一般教育に関する知識を授けるとともに深く専門の学術を研究教授するをもって目的とし、特に日本及び亜細亜の文化社会の研究と建設的実践に重点を置き、もって亜細亜融合に新機軸を打ち出す人材を育成するをその使命とする。									
新設学部等の目的	社会学部は、建学の精神「自助協力」を体得し、社会学の知見と学問手法を基軸としつつ、他の社会諸科学の学問知識も生かしながら、社会の諸課題とその分析方法を学び、多様性の尊重の精神とグローバルな視点を持って、地域、企業、世界の現場で他者と協力して問題解決にあたることのできる人材を育成する。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地	
	社会学部 [Faculty of Sociology] 現代社会学科 [Department of Studies of Contemporary Society] 計	年 4	人 145	年次人 0	人 580	学士 (社会学)	経済学関係 社会学・社会福祉学関係	年 月 第 年次 令和7年4月 第1年次	東京都武蔵野市境 5丁目8番	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	都市創造学部（廃止） 都市創造学科 (△145) ※令和6年3月学生募集停止									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	社会学部 現代社会学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位				
	社会学部 現代社会学科	144科目	199科目	12科目	355科目					
新設	学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)	大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 11人
			教授	准教授	講師	助教	計			
	社会学部 現代社会学科		8人 (8)	4人 (4)	3人 (3)	0人 (0)	15人 (15)	0人 (0)	0人 (1)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの		8 (8)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	13 (13)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	2 (2)			
	小計（a～b）		8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）		8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)				
計		8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)	0 (0)			0 (1)

既	経営学部経営学科	11 (11)	12 (12)	12 (12)	0 (0)	35 (35)	0 (0)	0 (2)	大学設置基準別表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 12人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	18 (18)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	2 (2)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	11 (11)			
	小計（a～b）	11 (11)	12 (12)	6 (6)	0 (0)	29 (29)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	6 (6)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	11 (11)	12 (12)	12 (12)	0 (0)	35 (35)				
設	経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科	5 (5)	7 (7)	4 (4)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	0 (0)	大学設置基準別 表第一に定め る基幹教員数の 四分の三の数 8 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	4 (4)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)			
	小計（a～b）	5 (5)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	12 (12)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	4 (4)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	5 (5)	7 (7)	4 (4)	0 (0)	16 (16)				
分	経営学部データサイエンス学科	5 (5)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	大学設置基準別 表第一に定め る基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	4 (4)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	6 (6)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)			
	小計（a～b）	5 (5)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	7 (7)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	2 (2)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	5 (5)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	9 (9)				

既	経済学部経済学科	16 (16)	7 (7)	8 (8)	0 (0)	31 (31)	0 (0)	0 (0)	大学設置基準別表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 12人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	18 (18)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	5 (5)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	8 (8)			
	小計（a～b）	16 (16)	7 (7)	3 (3)	0 (0)	26 (26)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	5 (5)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）	16 (16)	7 (7)	8 (8)	0 (0)	31 (31)				
設	法学部法律学科	15 (15)	9 (9)	9 (9)	0 (0)	33 (33)	0 (0)	1 (2)	大学設置基準別表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 14人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者 であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	20 (20)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	4 (4)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	8 (8)			
	小計（a～b）	15 (15)	9 (9)	4 (4)	0 (0)	28 (28)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	5 (5)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）	15 (15)	9 (9)	9 (9)	0 (0)	33 (33)				
設	国際関係学部国際関係学科	9 (9)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	1 (4)	大学設置基準別表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 8人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	1 (1)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	4 (4)			
	小計（a～b）	9 (9)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	15 (15)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	3 (3)	0 (0)	3 (3)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）	9 (9)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	18 (18)				
分	国際関係学部多文化コミュニケーション学科	10 (10)	5 (5)	4 (4)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	0 (1)	大学設置基準別表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 8人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	6 (6)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	11 (11)	/	/	
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	4 (4)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	5 (5)			
	小計（a～b）	10 (10)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	16 (16)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	3 (3)	0 (0)	3 (3)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）	10 (10)	5 (5)	4 (4)	0 (0)	19 (19)				
計	71 (71)	47 (47)	43 (43)	0 (0)	161 (161)	0 (0)	2 (9)		
合 計	79 (79)	51 (51)	46 (46)	0 (0)	176 (176)	0 (0)	2 (10)		

職 種		専 属		そ の 他		計			
事 務 職 員		117 ( 117 )		25 ( 25 )		142 ( 142 )			
技 術 職 員		3 ( 3 )		0 ( 0 )		3 ( 3 )			
図 書 館 職 員		8 ( 8 )		0 ( 0 )		8 ( 8 )			
そ の 他 の 職 員		0 ( 0 )		0 ( 0 )		0 ( 0 )			
指 導 補 助 者		8 ( 8 )		0 ( 0 )		8 ( 8 )			
計		136 ( 136 )		25 ( 25 )		161 ( 161 )			
校 地 等	区 分	専 用		共 用		共用する他の 学校等の専用		計	
	校 舎 敷 地	145,646.70	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	145646.7	
	そ の 他	2,431.63	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	2431.63	
	合 計	148,078.33	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	148078.33	
校 舎		専 用		共 用		共用する他の 学校等の専用		計	
		67,584.15	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	0	m <sup>2</sup>	67584.15	
		( 67,584.15	m <sup>2</sup> )	( 0	m <sup>2</sup> )	( 0	m <sup>2</sup> )	( 67584.15	
教 室 ・ 教 員 研 究 室		教 室		140 室		教 員 研 究 室		221 室	
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図 書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕		機 械 ・ 器 具 点	標 本 点	学部単位での 特定不能 のため、大 学全体の教	
		冊	電子図書 〔うち外国書〕	種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕				
	社会学部	559,492 [163,586] (546,265 [162,032])	8,453 [2,434] (6,269 [1,900])	38,542 [35,715] (38,542 [35,715])	33,767 [33,766] (33,767 [33,766])	0	0		
	計	559,492 [163,586] (546,265 [162,032])	8,453 [2,434] (6,269 [1,900])	38,542 [35,715] (38,542 [35,715])	33,767 [33,766] (33,767 [33,766])	0	0		
ス ポ ー ツ 施 設 等		ス ポ ー ツ 施 設		講 堂		厚 生 補 導 施 設		大 学 全 体	
		4,693.61		1736.03		16,664.98			
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	届出学部全体  図書購入費 には電子 ジャーナ ル・デー タベース 整備費 (運用コ スト)を 含む)
		教員1人当り研究費等	400 千円	400 千円	400 千円	400 千円			
	共同研究費等	155 千円	305 千円	460 千円	609 千円				
	図書購入費	0 千円	3,798 千円	7,442 千円	11,242 千円	14,884 千円			
	設備購入費	0 千円	3,740 千円	5,063 千円	4,757 千円	9,400 千円			
	学生1人当り 納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	
		1,324 千円	1,060 千円	1,060 千円	1,060 千円				
学生納付金以外の維持方法の概要		学生納付金収入以外にも、手数料収入、補助金収入、資産運用収入、寄付金収入等があり、これらの収入も財政的な基盤に組み入れ維持・運営を図る。							

大学等の名称	亜細亜大学								所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度		
既設大学等の状況	経営学部 経営学科	4	325	15	1330	学士（経営学）	1.10	昭和45年度	東京都武蔵野市境5丁目8番	
	経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科	4	150	—	600	学士（経営学）	1.03	平成21年度		
	経営学部 データサイエンス学科	4	80	—	320	学士（経営学）	1.12	令和5年度		
	経済学部 経済学科	4	250	—	1000	学士（経済学）	1.10	昭和39年度		
	法学部 法律学科	4	320	—	1280	学士（法学）	1.06	昭和41年度		
	国際関係学部 国際関係学科	4	130	—	520	学士（国際関係）	1.12	平成2年度		
	国際関係学部 多文化コミュニケーション学科	4	130	—	520	学士（国際関係）	1.16	平成24年度		
	都市創造学部 都市創造学科	4	—	—	—	学士（都市創造学）	—	令和7年度より学生募集停止		
	アジア・国際経営戦略研究科 アジア・国際経営戦略専攻	博士前期課程	2	30	—	60	修士（経営学）	0.95		平成18年度 平成20年度
		博士後期課程	3	5	—	15	博士（経営学）	0.20		
	経済学研究科 経済学専攻	博士前期課程	2	15	—	30	修士（経済学）	0.36		昭和49年度 昭和51年度
		博士後期課程	3	3	—	9	博士（経済学）	0.11		
	法学研究科 法学専攻	博士前期課程	2	15	—	30	修士（法学）	0.90		昭和49年度 昭和51年度
博士後期課程		3	5	—	15	博士（法学）	0.00			
附属施設の概要										

## 学校法人亜細亜学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和7年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
<b>亜細亜大学</b>				<b>亜細亜大学</b>				
	3年次				3年次			
経営学部経営学科	325	15	1330	経営学部経営学科	325	15	1330	
ホスピタリティ・マネジメント学科	150		600	ホスピタリティ・マネジメント学科	150		600	
データサイエンス学科	80		320	データサイエンス学科	80		320	
経済学部経済学科	250		1000	経済学部経済学科	250		1000	
法学部法律学科	320		1280	法学部法律学科	320		1280	
国際関係学部国際関係学科	130		520	国際関係学部国際関係学科	130		520	
多文化コミュニケーション学科	130		520	多文化コミュニケーション学科	130		520	
都市創造学部都市創造学科	145		580		<u>0</u>		<u>0</u>	令和7年4月学生募集停止
				社会学部現代社会学科	<u>145</u>		<u>580</u>	学部設置（届出）
	3年次				3年次			
計	1530	15	6150	計	1530	15	6150	
<b>亜細亜大学大学院</b>				<b>亜細亜大学大学院</b>				
アジア・国際経営戦略研究科				アジア・国際経営戦略研究科				
アジア・国際経営戦略専攻	(M) 30		(M) 60	アジア・国際経営戦略専攻	(M) 30		(M) 60	
	(D) 5		(D) 15		(D) 5		(D) 15	
経済学研究科				経済学研究科				
経済学専攻	(M) 15		(M) 30	経済学専攻	(M) 15		(M) 30	
	(D) 3		(D) 9		(D) 3		(D) 9	
法学研究科				法学研究科				
法律学専攻	(M) 15		(M) 30	法律学専攻	(M) 15		(M) 30	
	(D) 5		(D) 15		(D) 5		(D) 15	
計	73		159	計	73		159	

### 設置の前後における学位等及び基幹教員の所属の状況

届出時における状況					新設学部等の学年進行終了時における状況						
学部等の名称	授与する学位等		異動先	基幹教員		学部等の名称	授与する学位等		異動元	基幹教員	
	学位又は称号	学位又は学科の分野		助教以上	うち教授		学位又は称号	学位又は学科の分野		助教以上	うち教授
都市創造学部 都市創造学科 (廃止)	学士 (都市創造学)	経済学 社会学・社会福祉学	都市創造学部都市創造学科	13	7	社会学部 現代社会学科	学士 (社会学)	経済学 社会学・社会福祉学	都市創造学部都市創造学科	13	7
			退職	1	1				新規採用	2	1
			計	14	8				計	15	8
経営学部 経営学科	学士 (経営学)	経済学	経営学部経営学科	33	10	経営学部 経営学科	学士 (経営学)	経済学	経営学部経営学科	33	10
			退職	2	1				新規採用	2	1
			計	35	11				計	35	11
経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科	学士 (経営学)	経済学	経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科	16	5	経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科	学士 (経営学)	経済学	経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科	16	5
			計	16	5				計	16	5
経営学部 データサイエンス学科	学士 (経営学)	経済学	経営学部データサイエンス学科	7	4	経営学部 データサイエンス学科	学士 (経営学)	経済学	経営学部データサイエンス学科	7	4
			退職	2	1				新規採用	2	1
			計	9	5				計	9	5
経済学部 経済学科	学士 (経済学)	経済学	経済学部経済学科	27	12	経済学部 経済学科	学士 (経済学)	経済学	経済学部経済学科	27	12
			退職	4	4				新規採用	4	4
			計	31	16				計	31	16
国際関係学部 国際関係学科	学士 (国際関係)	経済学 社会学・社会福祉学 文学	国際関係学部国際関係学科	18	9	国際関係学部 国際関係学科	学士 (国際関係)	経済学 社会学・社会福祉学 文学	国際関係学部国際関係学科	18	9
			計	18	9				計	18	9
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科	学士 (国際関係)	経済学 社会学・社会福祉学 文学	国際関係学部多文化コミュニケーション学科	18	9	国際関係学部 多文化コミュニケーション学科	学士 (国際関係)	経済学 社会学・社会福祉学 文学	国際関係学部多文化コミュニケーション学科	18	9
			退職	1	1				新規採用	1	1
			計	19	10				計	19	10

## 基礎となる学部等の改編状況

開設又は 改編時期	改編内容等	学位又は 学科の分野	手続きの区分
昭和30年4月	商学部商学科設置	経済学	設置認可(学部)
昭和37年4月	商学部経済学科設置	経済学	設置届出(学科)
昭和39年4月	経済学部経済学科設置	経済学	設置認可(学部)
昭和45年4月	商学部商学科を改組し 経営学部経営学科設置	経済学	変更届出(学部)
	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
昭和47年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
昭和51年4月	経済学部国際関係学科設置	経済学	設置認可(学科)
	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
昭和52年4月	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
昭和59年4月	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
昭和61年4月	経営学部経営学科の入学定員変更	経済学	学則変更
	経済学部経済学科の入学定員変更	経済学	学則変更
	経済学部国際関係学科の入学定員変更	経済学	学則変更
平成元年4月	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
平成2年4月	経営学部経営学科の入学定員変更	経済学	学則変更
	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
	経済学部国際関係学科の学生募集停止	経済学	学生募集停止(学科)
	国際関係学部国際関係学科設置	経済学、文学、理学	設置認可(学部)
	国際関係学部国際関係学科の入学定員変更	経済学、文学、理学	学則変更認可申請
平成3年4月	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学、文学、理学	学則変更
平成4年1月	学校教育法、大学設置基準並びに学位規則の一部改正に伴う変更（「学生定員」を「収容定員」に改めた）（学士が学位に位置付けられたことに伴い、学位記を授与するに改めた）	経済学、文学、理学	学則変更
	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
平成5年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
平成6年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学、文学、理学	学則変更
平成7年3月	経済学部国際関係学科の廃止	経済学	廃止届出
平成7年4月	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学、文学、理学	学則変更
平成9年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
平成10年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
平成11年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学、文学、理学	学則変更



平成12年4月	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学	学則変更
	経営学部経営学科の入学定員変更	経済学	学則変更認可申請
	経済学部経済学科の入学定員変更	経済学	学則変更認可申請
	国際関係学部国際関係学科の入学定員変更	経済学、文学、理学	学則変更認可申請
平成13年4月	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学、文学、理学	学則変更
平成14年4月	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学、文学、理学	学則変更
平成16年4月	経営学部経営学科 経営学専攻設置、ホスピタリティ専攻設置（2専攻を開設）	経済学関係	設置届出(専攻)
	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学関係	学則変更
	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学関係	学則変更
平成17年4月	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更
平成18年4月	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学関係	学則変更
	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更
平成19年4月	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更
平成20年4月	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更
平成21年4月	経営学部経営学科のカリキュラム変更	経済学関係	学則変更
	経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科設置	経済学関係	設置届出(学科)
	経営学部経営学科 経営学専攻廃止、ホスピタリティ専攻廃止（専攻を廃止し経営学部経営学科とする。）	経済学関係	学生募集停止(専攻)
	経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科収容定員変更	経済学関係	学則変更認可申請
	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更
平成22年4月	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更
平成24年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学関係	学則変更
	国際関係学部多文化コミュニケーション学科設置	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	設置届出(学科)
	国際関係学部多文化コミュニケーション学科収容定員変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更認可申請
	国際関係学部国際関係学科収容定員変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更届出
平成26年3月	経営学部経営学科ホスピタリティ専攻の廃止	経済学関係	廃止届出
平成28年4月	経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科収容定員変更	経済学関係	学則変更認可申請
	都市創造学部都市創造学科設置	経済学関係 社会学・社会福祉学関係	設置届出(学部)
令和5年4月	経営学部データサイエンス学科設置	経済学関係	設置届出(学科)
	国際関係学部国際関係学科のカリキュラム変更	経済学関係 社会学・社会福祉学関係 文学関係	学則変更
令和6年4月	経済学部経済学科のカリキュラム変更	経済学関係	学則変更
令和7年4月	都市創造学部都市創造学科の学生募集停止	経済学関係 社会学・社会福祉学関係	学生募集停止(学部)
	社会学部現代社会学科設置	経済学関係 社会学・社会福祉学関係	設置届出(学部)

## 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会学部現代社会学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員以外(助手を除く)の教員	
専門教育科目	基礎ゼミナールⅠ	1前		2				○		7	4	3			1		
	基礎ゼミナールⅡ	1後		2				○		7	4	3			1		
	卒業研究ゼミナールⅠ	3前	○	2				○		8	4	1			1		
	卒業研究ゼミナールⅡ	3後	○	2				○		8	4	1			1		
	卒業研究ゼミナールⅢ	4前	○	2				○		8	4	1			1		
	卒業研究ゼミナールⅣ	4後	○	2				○		8	4	1			1		
	社会学入門	1前	○	2				○			1						
	社会調査入門	1前	○	2				○			1						
	ITパスポート入門	3前	○	1					○	1							オンデマンド
	小計(9科目)	—	—	—	17	0	0		—	8	4	3	0	0	1		
選択必修科目	ゲームニクス概論	1後	○		2			○		1							
	ビジネス経済概論	1後	○		2			○		1							
	社会心理学概論	2前	○		2			○						1		4単位必修	
	経営学概論	2前	○		2			○				1					
	ゼロから学ぶPCスキル	1前	○		2			○		1							
	ゼロから学ぶプログラミング	1後	○		2			○							1		
	社会調査の方法	1後	○		2			○			1						
	量的調査基礎(統計学)	2前	○		2			○			1						
	質的調査基礎(資料分析)	2前	○		2			○		1							
	データ活用実習	2前	○		2			○							1		
	量的調査法(統計分析)	2後	○		2			○			1						
	質的調査法(インタビュー)	2後	○		2			○			1						
小計(12科目)	—	—	—	0	24	0		—	3	2	1	0	0	3			
選択科目	消費社会論	1前			2			○		1							
	遊びの社会学	2前			2			○		1							
	サブカルチャー論Ⅰ	2前			2			○		1							
	サブカルチャー論Ⅱ	2後			2			○		1							
	ゲーム産業論	2後			2			○		1							
	クリエイティブ産業論	2後			2			○							1		
	テーマパークの社会学	3前			2			○		1							
	消費者行動論	3前			2			○							1		
	コンテンツ産業論	3後			2			○							1		
	アートと社会	3後			2			○		1							
	ソーシャルネットワーク論	1後			2			○			1						
	街づくり論	2前			2			○							1		
	異文化コミュニケーション論	2前			2			○							1		
	家族社会論	2前			2			○			1						
	NPO・NGO論	2後			2			○							1		
	地域コミュニティ論	3前			2			○							1		
	福祉社会論	3前			2			○							1		
	少子高齢化社会論	3前			2			○							1		
	都市空間論	3後			2			○				1					
	共生社会論	3後			2			○							1		
	組織と社会	3後			2			○				1					
	建築デザインと社会	2前			2			○		1							
	グローバル市場戦略論	2前			2			○		1							
	会計情報基礎	2前			2			○			1						
会計情報概論	2後			2			○			1							
アジアの都市と社会	2後			2			○		1	1							
マーケティング論	2後			2			○							1			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考			
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹(助手を除く) 教員以外の教員		
専門 教育 科目	リスクマネジメント	2後			2		○									1		
	現代国際金融論	3前			2		○			1								
	PPP/PFIと都市開発	3前			2		○			1								
	産業政策と産業構造	3前			2		○			1							オンデマンド	
	イノベーション論	3前			2		○			1								
	空間デザイン演習	3前			2			○		1								
	メガシティ論	3前			2		○				1							
	ファイナンス論	3後			2		○			1								
	地域産業振興論	3後			2		○			1								
	都市計画論	3後			2		○			1								
小計 (37科目)	—	—	—	0	74	0		—		8	3	2				7		
全学 共通 科目	日本語 I	1前			1			○									3	外国人 留学生は 8単位 必修
	日本語 II	1前			1			○									5	
	日本語 III	1前			1			○									3	
	日本語 IV	1前			1			○									4	
	日本語 V	1後			1			○									3	
	日本語 VI	1後			1			○									5	
	日本語 VII	1後			1			○									3	
	日本語 VIII	1後			1			○									4	
	英語 I	1前			2			○										22
	英語 II	1後			2			○										22
	総合英語 I	1前			1			○				1						5
	総合英語 II	1後			1			○				1						5
	アラビア語初級 I	1前			1			○										3
	アラビア語初級 II	1後			1			○										3
	アラビア初級語 III	1前			1			○										3
	アラビア語初級 IV	1後			1			○										3
	中国語初級 I	1前			1			○				1						11
	中国語初級 II	1後			1			○				1						11
	中国語初級 III	1前			1			○										7
	中国語初級 IV	1後			1			○										7
	ドイツ語初級 I	1前			1			○										4
	ドイツ語初級 II	1後			1			○										4
	ドイツ語初級 III	1前			1			○										4
	ドイツ語初級 IV	1後			1			○										4
	フランス語初級 I	1前			1			○										7
	フランス語初級 II	1後			1			○										7
	フランス語初級 III	1前			1			○										7
	フランス語初級 IV	1後			1			○										7
	ヒンディー語初級 I	1前			1			○										2
	ヒンディー語初級 II	1後			1			○										2
	ヒンディー語初級 III	1前			1			○										2
	ヒンディー語初級 IV	1後			1			○										2
	インドネシア語初級 I	1前			1			○										4
インドネシア語初級 II	1後			1			○										4	
インドネシア語初級 III	1前			1			○										4	
インドネシア語初級 IV	1後			1			○										4	
韓国語初級 I	1前			1			○										10	
韓国語初級 II	1後			1			○										10	
韓国語初級 III	1前			1			○										10	
韓国語初級 IV	1後			1			○										10	
モンゴル語初級 I	1前			1			○										1	
モンゴル語初級 II	1後			1			○										1	
モンゴル語初級 III	1前			1			○										1	
モンゴル語初級 IV	1後			1			○										1	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考			
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹(助手を除く) 教員以外の教員		
全学共通科目	ポルトガル語初級Ⅰ	1前			1				○								1	
	ポルトガル語初級Ⅱ	1後			1				○								1	
	ポルトガル語初級Ⅲ	1前			1				○								1	
	ポルトガル語初級Ⅳ	1後			1				○								1	
	ロシア語初級Ⅰ	1前			1				○								2	
	ロシア語初級Ⅱ	1後			1				○								2	
	ロシア語初級Ⅲ	1前			1				○								2	
	ロシア語初級Ⅳ	1後			1				○								2	
	スペイン語初級Ⅰ	1前			1				○								8	
	スペイン語初級Ⅱ	1後			1				○								8	
	スペイン語初級Ⅲ	1前			1				○								8	
	スペイン語初級Ⅳ	1後			1				○								8	
	タイ語初級Ⅰ	1前			1				○								2	
	タイ語初級Ⅱ	1後			1				○								2	
	タイ語初級Ⅲ	1前			1				○								2	
	タイ語初級Ⅳ	1後			1				○								2	
	ベトナム語初級Ⅰ	1前			1				○								3	
	ベトナム語初級Ⅱ	1後			1				○								3	
	ベトナム語初級Ⅲ	1前			1				○								3	
	ベトナム語初級Ⅳ	1後			1				○								3	
	心理学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									4	
	心理学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○									4	
	国際関係論Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									1	
	国際関係論Ⅱ	1・2・3・4後			2			○									1	
	中国研究Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									1	
	中国研究Ⅱ	1・2・3・4後			2			○									1	
	東南アジア研究Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									1	
	東南アジア研究Ⅱ	1・2・3・4後			2			○									1	
	文章表現	1・2・3・4前後			2			○									7	
	情報と社会Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									2	
アジアを知る12章	1・2・3・4前後			2				○								1		
小計(67科目)	—	—	—	0	80	0			—		0	0	2				119	
選択科目	アラビア語中級Ⅰ	2前			1				○								3	
	アラビア語中級Ⅱ	2後			1				○								3	
	アラビア語中級Ⅲ	2前			1				○								3	
	アラビア語中級Ⅳ	2後			1				○								3	
	中国語中級Ⅰ	2前			1				○								7	
	中国語中級Ⅱ	2後			1				○								7	
	中国語中級Ⅲ	2前			1				○				1				6	
	中国語中級Ⅳ	2後			1				○				1				6	
	ドイツ語中級Ⅰ	2前			1				○								4	
	ドイツ語中級Ⅱ	2後			1				○								4	
	ドイツ語中級Ⅲ	2前			1				○								4	
	ドイツ語中級Ⅳ	2後			1				○								4	
	フランス語中級Ⅰ	2前			1				○								7	
	フランス語中級Ⅱ	2後			1				○								7	
	フランス語中級Ⅲ	2前			1				○								7	
	フランス語中級Ⅳ	2後			1				○								7	
ヒンディー語中級Ⅰ	2前			1				○								2		
ヒンディー語中級Ⅱ	2後			1				○								2		
ヒンディー語中級Ⅲ	2前			1				○								2		
ヒンディー語中級Ⅳ	2後			1				○								2		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹(助手を除く) 教員以外の教員	
全学共通科目	インドネシア語中級Ⅰ	2前			1				○							4	
	インドネシア語中級Ⅱ	2後			1				○							4	
	インドネシア語中級Ⅲ	2前			1				○							4	
	インドネシア語中級Ⅳ	2後			1				○							4	
	韓国語中級Ⅰ	2前			1				○							10	
	韓国語中級Ⅱ	2後			1				○							10	
	韓国語中級Ⅲ	2前			1				○							10	
	韓国語中級Ⅳ	2後			1				○							10	
	モンゴル語中級Ⅰ	2前			1				○							1	
	モンゴル語中級Ⅱ	2後			1				○							1	
	モンゴル語中級Ⅲ	2前			1				○							1	
	モンゴル語中級Ⅳ	2後			1				○							1	
	ポルトガル語中級Ⅰ	2前			1				○							1	
	ポルトガル語中級Ⅱ	2後			1				○							1	
	ポルトガル語中級Ⅲ	2前			1				○							1	
	ポルトガル語中級Ⅳ	2後			1				○							1	
	ロシア語中級Ⅰ	2前			1				○							2	
	ロシア語中級Ⅱ	2後			1				○							2	
	ロシア語中級Ⅲ	2前			1				○							2	
	ロシア語中級Ⅳ	2後			1				○							2	
	スペイン語中級Ⅰ	2前			1				○							8	
	スペイン語中級Ⅱ	2後			1				○							8	
	スペイン語中級Ⅲ	2前			1				○							8	
	スペイン語中級Ⅳ	2後			1				○							8	
	タイ語中級Ⅰ	2前			1				○							2	
	タイ語中級Ⅱ	2後			1				○							2	
	タイ語中級Ⅲ	2前			1				○							2	
	タイ語中級Ⅳ	2後			1				○							2	
	ベトナム語中級Ⅰ	2前			1				○							3	
	ベトナム語中級Ⅱ	2後			1				○							3	
	ベトナム語中級Ⅲ	2前			1				○							3	
	ベトナム語中級Ⅳ	2後			1				○							3	
	英語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前			1				○							22	
	英語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後			1				○							22	
	英語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前			1				○							22	
	英語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後			1				○							22	
	英語コミュニケーションⅤ	1・2・3・4前			1				○							22	
	英語コミュニケーションⅥ	1・2・3・4後			1				○							22	
	英語コミュニケーションⅦ	1・2・3・4前			1				○							22	
	英語コミュニケーションⅧ	1・2・3・4後			1				○							22	
	中国語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前			1				○							4	
	中国語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後			1				○							4	
	中国語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前			1				○							3	
	中国語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後			1				○							3	
ドイツ語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前			1				○							1		
ドイツ語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後			1				○							1		
ドイツ語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前			1				○							1		
ドイツ語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後			1				○							1		
フランス語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前			1				○							3		
フランス語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後			1				○							3		
フランス語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前			1				○							3		
フランス語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後			1				○							3		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考			
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹(助手を除く) 教員以外の教員		
全学共通科目	韓国語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前			1				○								10	
	韓国語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後			1				○								10	
	韓国語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前			1				○								10	
	韓国語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後			1				○								10	
	スペイン語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前			1				○								3	
	スペイン語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後			1				○								3	
	スペイン語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前			1				○								3	
	スペイン語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後			1				○								3	
	American Issues	2・3・4前			2					○							1	
	Global Studies	2・3・4後			2			○									1	
	アジアの伝統文化	1・2・3・4前後			2			○									1	
	西洋史Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									1	
	西洋史Ⅱ	1・2・3・4後			2			○									1	
	東洋史Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									1	
	東洋史Ⅱ	1・2・3・4後			2			○									1	
	日本史Ⅰ	1・2・3・4前			2			○									2	
	日本史Ⅱ	1・2・3・4後			2			○									2	
	中国語応用Ⅰ	2・3・4前			1					○							1	
	中国語応用Ⅱ	2・3・4後			1					○							1	
	中国語応用Ⅲ	2・3・4前			1					○							1	
	中国語応用Ⅳ	2・3・4後			1					○							1	
	ドイツ語応用Ⅰ	2・3・4前			1					○							1	
	ドイツ語応用Ⅱ	2・3・4後			1					○							1	
	ドイツ語応用Ⅲ	2・3・4前			1					○							1	
	ドイツ語応用Ⅳ	2・3・4後			1					○							1	
	フランス語応用Ⅰ	2・3・4後			1					○							3	
	フランス語応用Ⅱ	2・3・4後			1					○							3	
	フランス語応用Ⅲ	2・3・4後			1					○							3	
	フランス語応用Ⅳ	2・3・4後			1					○							3	
	韓国語応用Ⅰ	2・3・4前			1					○							10	
	韓国語応用Ⅱ	2・3・4後			1					○							10	
	韓国語応用Ⅲ	2・3・4前			1					○							10	
	韓国語応用Ⅳ	2・3・4後			1					○							10	
	ロシア語応用Ⅰ	2・3・4前			1					○							2	
	ロシア語応用Ⅱ	2・3・4後			1					○							2	
	ロシア語応用Ⅲ	2・3・4前			1					○							2	
	ロシア語応用Ⅳ	2・3・4後			1					○							2	
	スペイン語応用Ⅰ	2・3・4前			1					○							2	
	スペイン語応用Ⅱ	2・3・4後			1					○							2	
	スペイン語応用Ⅲ	2・3・4前			1					○							2	
	スペイン語応用Ⅳ	2・3・4後			1					○							2	
	海外語学実習Ⅰ	1・2・3・4前後			1					○							1	
	海外語学実習Ⅱ	1・2・3・4前後			1					○							1	
	海外語学実習Ⅲ	1・2・3・4前後			1					○							1	
海外語学実習Ⅳ	1・2・3・4前後			1					○							1		
教養基礎(歴史からみた異文化交流)	1・2通			2					○							1		
教養基礎(Urban Problems and Urban Planning)	1・2通			2					○				1					
Doing HistoryⅠ	1・2・3・4前			2			○									1		
Doing HistoryⅡ	1・2・3・4後			2			○									1		
アメリカン・スタディーズⅠ	2・3・4前			4					○							1		
アメリカン・スタディーズⅡ	2・3・4後			4					○							1		
アジアン・スタディーズⅠ	2・3・4前			4					○							1		
アジアン・スタディーズⅡ	2・3・4後			4					○							1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹(助手を除く) 教員以外の教員	
全学共通科目	中級日本語Ⅰ	2前			1			○								2	外国人留学生のみ履修可
	中級日本語Ⅱ	2後			1			○								3	
	中級日本語Ⅲ	2前			1			○								2	
	中級日本語Ⅳ	2後			1			○								2	
	中級日本語Ⅴ	2前			1			○								3	
	中級日本語Ⅵ	2後			1			○								2	
	上級日本語Ⅰ	2前			1			○								2	
	上級日本語Ⅱ	2後			1			○								2	
	上級日本語Ⅲ	3前			1			○								1	
	上級日本語Ⅳ	3後			1			○								1	
	西洋文学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1	
	西洋文学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1	
	中国文学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1	
	中国文学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1	
	ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1	
	ヨーロッパの芸術と文化Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1	
	創造の世界Ⅰ(ことばとイメージ)	1・2・3・4前			2			○								1	
	創造の世界Ⅱ(アニメーションの世界)	1・2・3・4前			2			○								1	
	日本の表象文化	1・2・3・4後			2			○								4	
	日本文学(中古)	1・2・3・4前後			2			○								1	
	日本文学(中世)	1・2・3・4前後			2			○								1	
	日本文学(近世)	1・2・3・4前後			2			○								1	
	日本文学(近現代)	1・2・3・4前後			2			○								4	
	文章作成技法	2・3・4前後			2			○								2	
	表現とメディアⅠ	2・3・4前			2			○								4	
	表現とメディアⅡ	2・3・4後			2			○								4	
	詩と詩論	2・3・4前後			2			○								1	
	日本の伝統芸能	1・2・3・4前後			2			○								2	
	日本の美術	1・2前後			2			○								1	
	教養基礎(近現代日本の文化と表現)	1・2通			2				○							1	
	教養基礎(現代文学入門)	1・2通			2				○							1	
	教養基礎(チェスと文学)	1・2通			2				○							1	
	教養基礎(理論で読む現代文学)	1・2通			2				○							1	
	教養基礎(多様性とアートの教育学)	1・2通			2				○							1	
	経済学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1	
	経済学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1	
	現代教養特講	1・2・3・4後			2			○			1						
	災害救援活動論	1・2・3・4前			2			○								1	
	社会思想史Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1	
	社会思想史Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1	
	宗教学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1	
	宗教学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1	
女性学	1・2・3・4前後			2			○								2		
政治学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								2		
政治学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								2		
地誌学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1		
地誌学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1		
日本思想史Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								2		
日本思想史Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								2		
文化人類学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								1		
文化人類学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								1		
法学Ⅰ	1・2・3・4前			2			○								5		
法学Ⅱ	1・2・3・4後			2			○								4		
建学の精神を考える	1・2後			2			○								1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹(助手を除く) 教員以外の教員	
全学共通科目	哲学Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									1	
	哲学Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									1	
	倫理学Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									1	
	倫理学Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									1	
	心とからだの健康学	1・2・3・4前後			2		○									3	
	スポーツ実習	1・2・3・4前後			1				○							9	
	スポーツ科学概論	1・2・3・4前			2		○									1	
	救急処置・予防法	1・2・3・4後			2		○									1	
	スポーツ心理学	1・2・3・4前			2		○									1	
	スポーツ生理学	1・2・3・4後			2		○									1	
	人体の構造と機能	1・2・3・4前			2		○									1	
	スポーツトレーニング論	2・3・4後			2		○									1	
	スポーツの技術と戦術	2・3・4後			2		○									1	
	スポーツの測定と評価	2・3・4後			2		○									1	
	リーダーシップとコーチング	2・3・4前			2		○									1	
	情報と社会Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									1	
	情報リテラシー	1・2・3・4前後			2		○									5	
	宇宙と物質	1・2・3・4前後			2		○									1	
	環境科学	1・2・3・4前後			2		○									2	
	自然科学入門Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									3	
	自然科学入門Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									3	
	数学入門Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									1	
	数学入門Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									1	
	生物学Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									2	
	生物学Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									2	
	地理学Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									1	
	地理学Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									1	
	統計学入門Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									2	
	統計学入門Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									2	
	基礎数理Ⅰ	1・2・3・4前			2		○									3	
	基礎数理Ⅱ	1・2・3・4後			2		○									3	
	基礎数理Ⅲ	2・3・4前			2		○									1	
	基礎数理Ⅳ	2・3・4後			2		○									1	
	プログラミング言語Ⅰ	2・3・4前			2					○						4	
	プログラミング言語Ⅱ	2・3・4後			2					○						4	
データサイエンス入門	2・3・4後			2					○						3		
データサイエンス応用プロジェクトⅠ	2・3・4前			2					○						1		
データサイエンス応用プロジェクトⅡ	2・3・4後			2					○						1		
表計算とデータサイエンス	2・3・4後			2		○									5		
キャリアデザイン	1・2後			2		○									1		
キャリア・インターンシップ	2通			2		○									1		
総合学術演習Ⅰ	3通			4					○						4		
総合学術演習Ⅱ	4通			4					○						4		
小計(222科目)		—	—	0	337	0		—				1	0	2		159	
合計(355科目)		—	—	17	515	0		—				8	4	3		188	
学位又は称号		学士(社会学)		学位又は学科の分野			経済学関係					社会学・社会福祉学関係					
卒業・修了要件及び履修方法							授業期間等										
卒業要件:124単位以上 履修方法: 専門教育科目の必修科目17単位, 選択必修科目6単位, 選択科目50単位以上 全学共通科目の選択必修科目10単位, 選択科目26単位以上 但し, 外国人留学生は選択必修科目(日本語8単位を含む)18単位, 選択科目18単位以上 その他に専門教育科目又は全学共通科目15単位以上の124単位以上修得すること。							1学年の学期区分			2学期							
							1学期の授業期間			13週							
							1時限の授業の標準時間			105分							



授業科目の概要					
(社会学部現代社会学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目	必修科目	基礎ゼミナールⅠ		入学直後の前期に社会とその探求を始めるための入門科目。都市や社会の魅力や課題のデータを収集することなどを通じて、1年次後期以降の学習の動機づけを得ることを目的とする。文章を読む、書く、調べる、他人の意見を聞くことから論理的な文章を検討し、自ら発表する事で成果物を作成する。合わせて、キャリアデザインに関する基本的な意識付けと自己行動を学ぶ。	
		基礎ゼミナールⅡ		基礎ゼミナールⅠにおいて把握した、社会の魅力や課題を実際に観察調査する科目。社会の魅力や課題の生ずる要因を中心に検討し、これらの要因がもたらされる背景を特定する。快適な社会づくりに必要な要素を考察し広く発信していくための方策を検討する。社会の課題については、これを解決して行く方法も議論する。	
		卒業研究ゼミナールⅠ	○	経営学や社会学を中心とした専門的知識やデータ分析能力を少人数での演習を通じてしっかりと身に付け、社会研究の実践へとつなげる科目。指導教員の専門領域の観点から、社会の魅力や高めるための企画を考案したり、社会が抱えるマクロな課題やそこで活動する企業や人々の課題とその解決を考える。卒業研究ゼミナールⅠでは、留学や就業体験といった2年次までの経験や学習内容を、卒業研究ゼミナールⅠ～Ⅳを通じた専門的な学びと架橋するための振り返りと議論を行う。また問題テーマやチームでの取り組み課題を決め、そのために必要な準備学習を行う。	
		卒業研究ゼミナールⅡ	○	経営学や社会学を中心とした専門的知識やデータ分析能力を少人数での演習を通じてしっかりと身に付け、社会研究の実践へとつなげる科目。指導教員の専門領域の観点から、社会の魅力や高めるための企画を考案したり、社会が抱えるマクロな課題やそこで活動する企業や人々の課題とその解決を考え、次年度の卒業論文・卒業プロジェクトに向けて問題意識を明確化させることを目指す。また少人数での議論・学習やチームでの課題取り組みを通じて、実践的な社会研究に必要な協働する能力や姿勢、主体的に取り組む能力を涵養する。	
		卒業研究ゼミナールⅢ	○	経営学や社会学を中心とした専門的知識やデータ分析能力を少人数での演習を通じてしっかりと身に付け、社会研究の実践へとつなげる科目。卒業研究ゼミナールⅢでは、卒業研究ゼミナールⅠ、Ⅱを通じて絞り込んだ問題関心や企画取り組みの経験を土台に、それを卒業論文化するのに有益な理論や分析手法をさらに深く学んだり、比較する事例を増やすなどとする。	
		卒業研究ゼミナールⅣ	○	経営学や社会学を中心とした専門的知識やデータ分析能力を少人数での演習を通じてしっかりと身に付け、社会研究の実践へとつなげる科目。卒業研究ゼミナールⅣでは、指導教官との相談や中間発表を繰り返しながら、個人またはチームでの卒論を完成させる。または卒業研究ゼミナールⅠ～Ⅲにおいて取り組んできた企画・プロジェクトに一定の終止符を打ち、成果報告の取りまとめや発表を行う。	
		社会学入門	○	現代社会をいかに捉え、未来社会をどのように構想できるかを考察する上で、社会学の基本的な知識を外観する科目。日常生活における身近で重要な基本概念から、複雑に多様化する現代社会における様々な社会現象まで、理論的中核と現代的傾向を考察の対象とする。	
		社会調査入門	○	高度に複雑化した現代社会を社会的に問題化する場合、各社会集団を具体的な研究関心に基づいて分析することが求められる。社会調査はその有力な方法である。本科目では、社会調査の歴史、目的や意義を学びつつ、量的調査・質的調査の類型を修得する。またフィールド調査の事例に基づいて、資料収集やデータ分析などのプロセスを概観し、社会調査の理解を深める。同時に調査倫理を学ぶことで社会調査の基礎的知識を涵養する。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目	必修科目	ITパスポート入門	○	本科目は、「ITパスポート試験」すなわち、「すべての社会人が備えておくべき、ITに関する基礎的な知識が証明できる国家試験」の合格を目指す試験対策科目である。内容は、「ストラテジ系(経営全般)」、「マネジメント系(IT管理)」、「テクノロジー系(IT技術)」に分かれる。具体的には、新しい技術(AI, IoT等)の概要に関する知識、経営全般(経営戦略、財務等)の知識、ITセキュリティ知識などを幅広く学ぶ。	
		選択必修科目	ゲームニクス概論	○	ゲーム制作のインターフェイスのノウハウである「ゲームニクス理論」の概論を学習。「ゲームニクス理論」はヒューマンファクター(人間工学)を含んだものづくりの具体的な方法論で、「人を夢中にさせる」ノウハウであるだけでなく、「使いやすく」「使い込める」制作テクニックでもある。そしてこのゲームニクスはゲームに限らず、家電、教育、電子出版、といったあらゆる分野に応用できる日本発の知恵であり、日本のものづくりの鍵ともなりうる世界に通用するノウハウでもある。 ゲームニクス理論の1と2はどんなに複雑なものであってもマニュアル不要で操作に迷うことなく使いこなす方法論、ゲームニクス3と4は製品やサービスにおいて思わず夢中になってもらう方法論、ゲームニクス5でバーチャルリアリティをリンクさせて利便性が高めていく方法論を講義し、最後はゲームニクス応用実践例としてサイトウの作った製品やサービスを提示する。
	ビジネス経済概論		○	ビジネス領域の専門知識を習得するための経済学の基本的な部分を学ぶ科目。経済の仕組みや、経済環境の変化とビジネスの発展、流通活動、外国為替レートや株価の決定の仕組み、キャッシュレス決済をはじめとする電子商取引などを理解する。そのうえで、そうしたビジネス情報の入手・活用方法も身につける。	
	社会心理学概論		○	社会における人々の行動とその背景となる心理について学ぶ科目。人と人との共感、協力、離反、対立等がいかに生じ、それが個人の心理にどのような影響を及ぼすかについて、理論的かつ実証的な説明を行う。社会心理学では「ステレオタイプ」「スティグマ」「確認バイアス」「傍観者効果」など、事象説明のための概念が多数確立されている。その内容を、具体的な事例を通して説明し、あわせてその概念の問題点についても考察する。	
	経営学概論		○	経営学を概略的に学習することで、現代の産業社会における企業経営の基本問題を理解する科目。 現代の産業社会を支える大きな柱は、企業活動によって生み出される経済価値である。よって、産業社会の正しい理解には、企業経営の本質を理解することが不可欠となる。しかし、現代企業経営の要素は生産管理、マーケティング、会計などに細分化されている。したがって、これら企業経営に必要な要素の全体像を把握する必要がある。経営学の学習を通して、グローバル化、オープンイノベーション、社会的責任といった課題に対応する経営のあり方を論議する。	
	ゼロから学ぶPCスキル		○	ビジネスにおいて当たり前のように使用されている、Word、Excel、PowerPointの基礎から使いこなすまでを実践で学ぶ講義。 Wordでは、文字の記載方法、文字の大きさ、色の変化、書体の選択などといった基本から文字の修飾や変形、改行や行間の調整といったところまでを実践。 Excelでは、Wordで学んだ文字の記載方法から始まり、改行の仕方、上下左右の文字枠の設定から、かんたんな表計算といったところまでを実践。 PowerPointでは、文字の記載方法は当然ながら、飾り文字や枠色の付け方、画像や動画の貼り付けと再生方法、WordやExcelも含めた効果的なショートカット例、加えて企業で実践可能なアニメーションを駆使した効果的なプレゼンテーションノウハウも実践する。	
	ゼロから学ぶプログラミング		○	いまや現代社会に必須ともいえるプログラムを、まったくの基礎知識がないところから、簡単なウェブサイトやゲームアプリを制作できるまでを学ぶ。 スマートフォンやタブレット、PCの普及により、一般企業でもその活用は必須となっている。この講義ではこうした基礎的なプログラムの活用能力を職業の場で活かせるまでの知識を実践力として身につけ、就職活動においても強くアピールできるノウハウを学ぶ。 数学知識などゼロでも組めるプログラムテクニックや具体的な記述方法を学習したうえでコーディングの実習をスタート。アイコンとリンクする画面遷移の構築や動画と音声の埋め込みから、わかりやすい画面レイアウト、動作を誘う動的なアイコン演出、効果的な画面切り替えの演出など、ゲームニクス監修によるプログラム作成の作り込みを実践する。	
	社会調査の方法	○	本科目では、社会調査の方法論に基づいて資料やデータを収集し、分析可能な形にまで整理していく一連のプロセスを修得する。具体的には、調査目的と方法、調査方法の選択、調査立案、仮説構築、対象者の選定の諸方法、サンプリング法、調査票の作成術、調査の実施方法(調査票の配布・回収法、インタビュー調査法)、調査データの整理方法などを学びつつ理解する。		
量的調査基礎(統計学)	○	本科目では、推測統計学の基礎的な知識を身につける。確率論の基礎、基本統計量、検定・推定理論とその応用、サンプリングの理論、属性相関係数、相関係数、偏相関係数、変数のコントロール、回帰分析の基礎などを理解することで、社会調査に求められる多様な統計的データを解析する能力を涵養する。			

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目	選択必修科目	質的調査基礎(資料分析)	○ 本科目では、統計分析などの基礎を学ぶ。単純集計、度数分布、代表値、散布度、クロス集計などの記述統計データやグラフの読み方、それらの計算や資料作成の方法を理解し、公的統計や調査報告書など基本的な資料を分析・読解する能力を身につける。また相関係数など基礎的統計概念、因果関係と相関関係の区別、擬似相関の概念などの理解を深める。あわせて定性的なデータの読み方にも習熟する。	
		データ活用実習	○ ビッグデータの解析と活用の基本を実践的に学ぶ科目。国、地方公共団体及び事業者が保有する官民データのうち、インターネット等を通じて容易に利用できる形で公開されたオープンデータを、統計ソフトを活用しながら現代社会の特徴について分析する基礎的な利用技術を修得する事を目的としている。	
		量的調査法(統計分析)	○ 本科目では、社会学的データ分析で用いる基礎的な多変量解析法の考え方について学ぶ。統計データから社会的に意味のある結果を導き出すための方法として、重回帰分析を中心として、分散分析、因子分析、主成分分析、分散分析、クラスター分析などを修得し、多変量解析を使用できるようにする。	
		質的調査法(インタビュー)	○ 本科目では、質的調査の一つであるインタビュー調査の方法論について学修する。構造化・非構造化・半構造化といった、インタビュー調査の基本や倫理を理解しつつ、ライフヒストリー分析、会話分析、ドキュメント分析などの具体的な手法を学ぶ。またさまざまな質的調査の研究事例を読解し、インタビュー調査に習熟する。	
選択科目	消費社会論		現代社会は、今日、消費社会としての様相を呈している。すなわち、消費が、人々の社会生活を決定づける要因となっている事態がそれである。本科目では、このような消費社会の歴史や構造を、社会学的なアプローチで探究する。消費社会は、環境問題や格差問題とも結びついており、それらも、本科目の関心に含まれる。	
	遊びの社会学		遊びは、社会学的な文脈では、他の目的のための手段としての活動ではなく、それ自体を目的とする活動と規定される。本科目では、古典的な研究に依拠した、遊びの理論的考察に加えて、歴史的な文脈のなかで、遊びが今日どのような様相を呈しているかを、具体的な事例を通して探究する。	
	サブカルチャー論 I		若者に最も身近な音楽と関連付けて権威や流行(メインカルチャー)に対峙する人種差別や若者文化(サブカルチャー)という視点でカルチャーの発展と真髄を考察する。 音楽・文学・哲学・絵画・演劇などすべてのカルチャーであるヨーロッパに対し、サブカルチャーとしての位置づけられているアジア・アフリカの伝統文化。新大陸アメリカにおいてそのメインとサブがミクスチャーされジャズが発生。以降ジャズは黒人奴隷の自由希求とともにカウンターカルチャーとしてメインに刺激を与え、スウィング、ハードバップ、クールへと変遷。ジャズから分岐したジャイブはミュージカルやジャズダンス、ブルースやリズムアンドブルースはロックンロールへと発展し、メインのイギリスに刺激を与え、ビートルズやプログレッシブに代表される現在の普遍的なメインカルチャーとなるロックへと成熟していく流れを考察し、自ら社会を変えていく自覚を教養を身につける。	
	サブカルチャー論 II		演劇や映画、ゲームといったエンターテインメントをテーマとして講義を進め、漫画やアニメを切り口に日本におけるサブカルを取り上げていく。 戦後のハワイアンやジャズ、高度成長期における左翼的な学生運動とそれに伴うプロテストソングやフォーク、フーテンやアングラ演劇と行った日本独自のサブカルチャーに発展。 政府の安定と生活の豊かさをもたらした1980年代になると、権力という明確な反抗すべきメインを失い、原宿や渋谷を中心に情報発信する雑誌をもとにしたファッションや、ラジオに端を発するニューミュージックによる「個人カルチャー」を醸成。個人主義の力学は自己の内面に向うことで日本独自のサブカルに変形し、そこから生まれたエヴァンゲリオンやスーパーマリオといった今につづく若者の日本サブカル文化形成していく。 このサブカルチャーからサブカルに変化する経緯や課題、そこから脱却するための未来への思考を考察する。	
	ゲーム産業論		いまやゲーム産業の市場規模はハリウッドを中心とした映画産業の数倍になっている。その世界市場を推進しているのは日本であり、これは日本文化史上において稀有なことである。日本はスペックで他国と比較ができる車やテレビといったハードウェアにはものづくりにおいて経済発展をなすえ、文学、歌、映画といったソフトウェアでは世界スタンダードに手向かえずにいたが、ゲームという表現においてはのみ世界スタンダードを確立し、いまだそのリーダーとなっている。 本講義はアメリカの模倣から始まった日本のゲーム産業が世界産業までに至る試行錯誤の経緯を、ファミコン黎明期から任天堂のゲーム制作に関わったサイトウだからこそ知り得た内容とともに多様な視点から赤裸々に開示し「世界に問うべき本来の日本のものづくり」を提示しすることで、日本産業の復活にもつながる将来のエンターテインメントビジネスへの展望を考察していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目	選択科目	クリエイティブ産業論	クリエイティブ産業について、世界各国での定義や状況をふまえ、日本の現状、特性を理解する科目。クリエイティブ産業で生産される創造的生産物を経済的資源として産業政策の観点から検討するとともに、制作部門のクリエイターの労働市場についても、各国の政策や研究を含め、把握する。日本のクリエイティブ産業、クリエイティブな労働環境の拡大に向けた課題、可能性について考察する。	
		テーマパークの社会学	テーマパークにおいて示される物語的な商品及びサービス提供の仕組みが、現代消費社会のひとつの基軸となっている。またそこでは人々が想像する「テーマ」がさまざまな方法で可視化され、目に見える一つの統一的なイメージを形作っている。このような視点に立って、テーマパークがそれを取り巻く社会・文化・都市などの文脈のなかでどのように語られ、成立発展してきたか、社会学的視点で分析する。	
		消費者行動論	消費者の購買行動を、消費者の心理過程の分析によって説明することを考える科目。消費者個人のニーズ・ウォンツや、社会的評価、価値観、流行に対する態度、場所・時間、購買目的などに影響を受ける購買行動の背後にある人間心理を解説するとともに、消費者心理を把握するために企業で行われている調査手法と適用範囲について、実例を交えて具体的に理解できるように検討していく。	
		コンテンツ産業論	コンテンツ産業について、その構造や社会変化をふまえた動向を理解し、個別のコンテンツ産業の特性と課題を、国家戦略にも注視しながら把握する科目。仮想空間上のコンテンツ制作やAIの台頭などコンテンツ側の変化とともに、ネットワーク化の一層の進展などコンテンツを流通させるメディア(事業者)のビジネスモデル変化にも着目し、日本のコンテンツ産業の課題と発展可能性について理解を深める。	
		アートと社会	社会とアートの関係を考える科目。アートとはそのラテン語の語源の解釈通り人間による技を利用した広い範囲と活動を示す。現代社会の中には、単なる美術作品に限らずそれを収納する美術館から、美しい橋梁や道路など様々なアートが存在する。この科目ではそれら人間が作り出したアートやその結果として存在する建物や人の心も含めた解釈でのアートと社会の関係について考え、学んで行く。	
		ソーシャルネットワーク論	現代社会を生きる人々は人間同士の目に見えない複雑なつながり、ソーシャルネットワークの中に存在する。本科目では、ソーシャルネットワークの基本的な考え方、様々な構造や課題について、具体的な事例を通して解説する。ここでは感情の伝染からSNSの交流まで、日常生活の様々な場面を扱い考察する。対象は個人間だけでなく、経済社会の組織間にまで及ぶ。	
		街づくり論	街づくりを進めていくために不可欠な、要求理解力、問題分析力、実行力を涵養するための科目。街づくりを実際に推進するためには、そこに住む人々のもっている要求を理解し、行政上の制約を考慮しながら住民の抱える問題を分析し、有効なソリューションを見出さなくてはならない。これらの能力を涵養するため、問題解決のプロセスと実行を体験的に学ぶ。	
		異文化コミュニケーション論	国際間および異文化間における社会での円滑なコミュニケーションと協力関係をはぐくむための科目。異文化コミュニケーションは、文化背景の異なる人々や組織の間で行われる交流のための方法を指す。価値観を異にする人々が交流する際には、互いに協力しなければ解決できない課題が多く発生する。異なる文化をもつ人々が相互を理解するための術を解説する。	
		家族社会論	現代社会を生きる私たちにとって最も身近に存在する家族に関する学びを通じ、社会における集団と人間関係の基本的な考え方を理解する。家族をめぐる定義、変遷、役割や機能、結婚やジェンダーの多様な捉え方、家事や子育て、家族的存在の拡がりといった点を具体的に取り上げる。今後、個人化と多様化が一層進む中で、これからの家族のあり方がどのように変化するかを考察する。	
		NPO・NGO論	NPO・NGOの概念、実態を整理し、現代社会においてNPO・NGOが果たす役割と課題を検討する科目。企業や行政はそれらに関与する人々の利害を調整する必要があるため、社会にとって最適な行動を選択するとは限らない。企業は株主や顧客の、行政は管轄地域住民の、それぞれ利害を優先し、そこから漏れた人々の利害は後回しとなる。NPO(非営利組織)・NGO(非政府組織)は、こうした社会的な隙間にある問題に対応する組織であり、1998年に特定非営利活動法人法が成立し、法人格を持つことができるようになって以降、社会的役割が急速に拡大した。法人設立の要件や運営も含め、こうした組織の実態と課題、可能性について検討していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 選択科目	地域コミュニティ論		社会を取り巻く環境の変化が地域コミュニティへ及ぼす影響を理解し、「まちづくり」にかかわる自治体、自治会・町内会、住民、企業、など、地域コミュニティを構成する主体の役割や課題の変化を論ずる科目。地域社会において、地縁による団体への加入率低下等つながりの希薄化が進行する一方、福祉や防災などの課題への対応の必要性は高まっている。社会変化に伴う地域コミュニティの変化、実態について各種の事例を含めて検討する。	
	福祉社会論		福祉について社会学理論や方法を用いて説明する科目。福祉の概念、ケア、不平等と貧困、社会的排除と包摂、ケイバビリティ、レジーム、ジェンダー、コミュニティ、サードセクターといった視点を通じた問題と課題を考察する。また行政による保障を裏づける政策について検討する。	
	少子高齢化社会論		少子高齢化が進行する現代社会の変容を把握し、少子高齢化社会に特有な課題を扱う科目。少子化と同時に高齢化が進行した社会問題を把握するとともに、少子高齢化の進行に伴って、社会がどのように変容していくのかを説明する。	
	都市空間論		都市の内部における交通のシステムと都市間の交通システムを検討し、効率と秩序のある都市の交通のあり方を考える科目。交通技術の発達は、都市内部における効率的な輸送を実現し、都市間での超高速の移動を可能にしてきた。こうした交通技術発達が都市の機能に与える社会経済的な影響を、都市の実例を解釈しながら検討する。	
	共生社会論		現代社会における異文化共生と公共性を考察する科目。民主主義の理念と公正の概念についても理解する。また個人のアイデンティティを確立すると同時に多様性を尊重する価値観の形成に努める。社会における法と秩序や言論の自由、国、都市、コミュニティの文化変容と経済社会のあり方も含め理解し、市民としてのリーダーシップのあり方を考察する。	
	組織と社会		現代社会における組織の役割を、理論的視座から考察し学習する科目。組織は社会において必須の存在であるが、その役割は歴史の発展とともに変化している。また、それをより良く理解するための学問的なアプローチも多様化している。本科目では、そうした組織にまつわる様々な現象を、社会学における一分野である組織社会学の観点から紐解いていく。	
	建築デザインと社会		本科目は、我々が生活する都市の中で大きな役割を果たす建築と社会の関りを歴史的に考察するものである。また国内外の多様な事例を通して、建築デザインがどのように社会に貢献できるか考察していく。	
	グローバル市場戦略論		企業のグローバルな事業展開を支える市場戦略について学ぶ科目。グローバル市場の特性や時代による変化を学び、市場において競争優位を確立する方策を考える。従来型のモノのブランド構築に加え、ウェブにおけるサービスのブランド化も学ぶ。LVMHやフェラーリ、Amazonなど欧米企業のグローバル市場戦略に日本、中国、韓国企業のケースも加え、できるだけ具体的に学ぶ。ケーススタディによる演習も実施する。	
	会計情報基礎		経済活動を貨幣価値によって記述する複式簿記の基本を理解し、演習する科目。企業を中心とした経営分析の考え方についても解説する。複式簿記の技術は、財務活動を記録し、報告するために創造されたコミュニケーションツールである。このコミュニケーションツールを使いこなすことが、産業社会での共通言語を習得することに他ならない。本科目では、複式簿記の原理を解説し、この技術を習得するための訓練を行う。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 選択科目	会計情報概論		会計学の基本的な考え方を学び、アウトプットとしての会計情報を活用する方法を理解する科目。「会計」はステークホルダーに対して企業の経営実態を適切に開示するための側面(財務会計)と個別企業の経営活動に資するための側面(管理会計)の二面がある。こうした二つの側面を考慮しつつ、会計情報から企業の特色や業績、財務内容、株価の動きの基本的な読み方を解説する。	
	アジアの都市と社会		日本の現代社会における重要な課題や論点(少子高齢化・ダイバーシティ・ハウジング・交通とモビリティ・消費社会化・持続可能性等)を、近隣アジア諸国(特に東南アジアと東アジア)と比較する広い地理的・歴史的な視点で理解するための科目。講義では、これらの問題が都市化とどのように密接にかかわっているか、都市化の異なる歴史的・地理的なあり方が、課題の現れや解決策にどのように影響しているかを広域的なデータやいくつかの都市の詳しい事例から学ぶ。また、非アジア圏との比較から明らかになる日本・アジア諸国の特徴についても学ぶ。	
	マーケティング論		マーケティングは顧客、依頼人、パートナー、社会全体にとって価値のある提供物を創造・伝達・配達・交換するための活動として、現代社会に重要である。マネジリアルマーケティングの枠組みに沿って、マーケティング諸概念を学ぶ科目。企業の中核的な機能であるマーケティングの概念を理解し、セグメンテーション、ターゲティング、ポジショニング、マーケティングミックス、プロダクトライフサイクル、競争的マーケティング戦略の諸項目、さらには、近年発展著しいWebマーケティング等についても検討する。各種事例等を用いて理解を深める。	
	リスクマネジメント		リスクを組織的に管理し、リスクへの対応方法を考える科目。社会システムの開発といった大きなプロジェクトには、それ相応のリスクが伴う。リスクの発生する原因は物事の不確実性にある。不確実性の概念を整理し、リスクアセスメント、リスク軽減、リスク回避、リスク移転といったリスクマネジメントの基本を理解する。経済的な評価に基づいてリスクを保有する場合も含め、リスクへの対応とその事例を検討する。	
	現代国際金融論		グローバル化の進む現代社会で、企業・個人とも世界とつながり為替レート変動の影響が避けられなくなり、必要となる金融リテラシーを身につける科目。「貯蓄から投資へ」と呼ばれて久しいなか、銀行・証券など金融業が、企業の資金調達、個人の資産運用をどのようにサポートし、その際に金利や為替がどのように影響するかを理解も深め、ビジネスセンスを高める。	
	PPP/PFIと都市開発		都市開発に民間活力を導入する手法の理解と事例の検討を通じ、都市(地方自治体)と民間企業のより良い結合を考える科目。公民が連携して公共サービスの提供を行うスキームをPPP(パブリック・プライベート・パートナーシップ: 公民連携)と呼ぶ。また、PFI(プライベート・ファイナンス・イニシアティブ)は、公共施設等の設計、建設、維持管理及び運営に、民間の資金とノウハウを活用し、民間主導で行うことで、効率的かつ効果的な公共サービスの提供を図る考え方である。PFIはPPPの代表的な手法の一つであるとされる。本科目ではPFIを中心にPPPの実例と課題、将来的な発展の可能性を考える。	
	産業政策と産業構造		産業構造の変化について考察し、特にアジア諸国における産業構造と産業政策の関係を検討する科目。新興国経済の著しい発展は、世界経済全体の拡大に寄与し、停滞する先進国経済をも押しあげている。BRICSといわれる国々の台頭は、一方でこうした世界経済発展の推進要因となると同時に、他方で地球規模での産業構造の地殻変動を突き動かしている。企業の活動はグローバル化し、国を単位にした最適化ではもはや不十分であり、全世界的な最適化を企業は求めている。生産拠点は世界中に分散し、バリューチェーンは国境を優に超えている。産業構造がグローバルな企業活動に伴い変動する中、各国の産業政策のあり方を改めて考察する。	
	イノベーション論		現代社会の発展継続には、経済的価値や社会的価値を創出するイノベーションが必須であり、そのイノベーションの理論を学ぶ。さらに、イノベーションを1社や1組織で創出するのは難しいため、産学公連携等の連携という手法によって生み出している複数の事例を紹介し、様々な課題や解決方策を検討していく。	
	空間デザイン演習		建築や都市デザインを考えるうえで重要な「空間」について、その発想法や表現法を学ぶ。演習を通して、実際に空間を想像し、それらが都市空間の中でどのように機能するかを、スケールモデルの作成を通して把握するなど、五感を通して空間を考察することを目指す。	
メガシティ論		都市の巨大化の進行に伴い生ずる問題を特にメガシティを対象に、コンパクトシティの概念も考慮しながら検討する科目。メガシティは地域居住者1000万人以上の巨大都市を指し、東京を筆頭に20以上の都市がメガシティとされる。特に、成長著しいアジアの諸都市は、矛盾をはらみつつ巨大化し、メガシティの多くはアジアに位置している。こうしたアジア諸都市の問題を直視し、東京の経験をどのように生かしていくか、都市における社会の観点から考察する。		

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目	選択科目	ファイナンス論	事業活動における資金調達と資金運用の基本を学び、今日的なファイナンス手法の基礎について理解を深める科目。貸借対照表やキャッシュフロー計算書の分析、コーポレート・ファイナンスを通じた企業価値算出の基礎知識などを学習し、まず①短期、長期の資金計画書作成方法および借入金返済計画の立て方を学習する。次いで②実務の世界における財務諸表を分析し、資金運用表およびキャッシュフロー計算書の読み方を学習する。さらに③Discounted Cash Flow(DCF)、Internal Rate of Return(IRR)、Weighted Average Cost of Capital(WACC)といったコーポレート・ファイナンスのコンセプトとその応用について学習する。周辺知識として④銀行の信用格付けや⑤投資ファンドの仕組みについても学習する。	
		地域産業振興論	地域が持続的に発展することは現代社会において重要であり、そのためには、地域の産業を振興させることが必須である。地域の天然資源や地域企業、産業集積等を含む地域資源を発掘し、活用し、組み合わせ、経済的価値たるイノベーションを創出していくことが肝要である。地域資源を活用してイノベーションを創出し、地域産業を振興するための戦略、方策等を各地域の事例から検討していく。	
		都市計画論	都市計画の具体的な事例を解説し、その基本的な考え方を学ぶ科目。実際の都市計画の過程を解説する。各都市の計画における課題を明らかにし、実際にどのような対応がなされてきたのかを理解することで、都市計画の重要な視点を学習し、都市計画法などの規制や歴史にも考究する。	
全学共通科目	選択必修科目	日本語Ⅰ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。	
		日本語Ⅱ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。	
		日本語Ⅲ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。	
		日本語Ⅳ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目は、学部の専門科目を学習する際に必要な専門的な語彙や知識およびレポート作成の技術を学び、専門科目のレポート作成に備える。	
		日本語Ⅴ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅰ」を受け、より高度な文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。	
		日本語Ⅵ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅱ」を受け、より難易度の高い講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。	
		日本語Ⅶ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅲ」を受け、より難易度の高い社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択必修科目	日本語Ⅷ		日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べ能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目は、学部の専門科目を学習する際に必要な専門的な語彙や知識を学び、専門的な内容のレポートを作成する。	
	英語Ⅰ		意思疎通を図る手段としての英語力を身に付けることを目指し、実践的な英語学習を中心とするクラスである。週5回、集中的に英語に接することにより、コミュニケーション能力、特に聴解力、会話力の向上を目的としている。そのため、受動的に学ぶ姿勢ではなく主体的、積極的な学習態度が要求される。それは「出席」と「参加」の違いでもあり、クラスへ「参加」することにより、一層の英語力の向上が期待できるという方針で授業は進められる。またTOEIC®形式の練習も随時行う。	
	英語Ⅱ		前期の「英語(フレッシュマン・イングリッシュ)Ⅰ」に続くクラスである。基本的な目的・内容は変わらないが、後期には更に自主的な学習態度が要求される。前期と同じように「参加型」のクラスの中で、英語を用いて課題の発表やプロジェクトなども行われる。英語力の向上の程度は各自の学習態度に大きく左右されることは変わらない。更に積極的・自主的に学ぶ習慣を身に付けてもらいたい。また、TOEIC®形式の練習も随時行う。	
	総合英語Ⅰ		読解力と異文化理解の向上を図ることを目的とする科目である。指定テキストを使用し、日米の文化比較的視点から描かれた、様々な場面を想定したリーディングの読解を通して、異文化理解の実験を経験する。英語Ⅰ・Ⅱで学んだ伝達のための訓練を有機的に結び付け、効果的な英語運用能力の向上につなげていく。	
	総合英語Ⅱ		「総合英語Ⅰ」と同じく読解力と異文化理解の向上を図ることを目的とする科目である。「総合英語Ⅰ」で学んだことを発展させ、指定テキストおよび関連する副教材を通して、特に日米間の事例を検討しながら、異文化理解の実験について考察を深めることによって、更なる英語運用能力の向上につなげていく。	
	アラビア語初級Ⅰ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはいけない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	アラビア語初級Ⅱ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	アラビア語初級Ⅲ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	アラビア語初級Ⅳ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
中国語初級Ⅰ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはいけない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。		



科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択 必修科目	中国語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		中国語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		中国語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		ドイツ語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ドイツ語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ドイツ語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		ドイツ語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		フランス語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		フランス語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		フランス語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択必修科目	フランス語初級Ⅳ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ヒンディー語初級Ⅰ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ヒンディー語初級Ⅱ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ヒンディー語初級Ⅲ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ヒンディー語初級Ⅳ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	インドネシア語初級Ⅰ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	インドネシア語初級Ⅱ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	インドネシア語初級Ⅲ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	インドネシア語初級Ⅳ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	韓国語初級Ⅰ		初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択 必修科目	韓国語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		韓国語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		韓国語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		モンゴル語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		モンゴル語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		モンゴル語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		モンゴル語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		ポルトガル語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ポルトガル語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ポルトガル語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択 必修科目	ポルトガル語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		ロシア語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ロシア語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ロシア語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		ロシア語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		スペイン語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		スペイン語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		スペイン語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		スペイン語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		タイ語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択 必修科目	タイ語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		タイ語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		タイ語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		ベトナム語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅰ(前期)では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかり学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ベトナム語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級(読本)のクラスである。Ⅱ(後期)では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
		ベトナム語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅲ(前期)では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		ベトナム語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級(文法)クラスである。Ⅳ(後期)では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
		心理学Ⅰ	人間の行動・意識・無意識を研究対象とし、生理学や生物学、物理学、精神医学、統計学、コンピュータ科学といったさまざまな科学の発想と研究方法を取り入れ、人間及び人間社会の理解を追求する学問である。具体的な研究領域としては、発達(児童、青年、老年)、知覚・感覚、学習、認知(記憶、知能、思考)、性格、臨床、社会、組織があるが、これらの講義を通じて、自己理解を深めると同時に共感的な他者理解ができるような目を養うことを目的とする。「心理学Ⅰ」ではこの中のいくつかの領域を講義する。	
		心理学Ⅱ	人間の行動・意識・無意識を研究対象とし、生理学や生物学、物理学、精神医学、統計学、コンピュータ科学といったさまざまな科学の発想と研究方法を取り入れ、人間及び人間社会の理解を追求する学問である。具体的な研究領域としては、発達(児童、青年、老年)、知覚・感覚、学習、認知(記憶、知能、思考)、性格、臨床、社会、組織があるが、これらの講義を通じて、自己理解を深めると同時に共感的な他者理解ができるような目を養うことを目的とする。「心理学Ⅱ」では「心理学Ⅰ」で扱わなかった領域について講義する。	
		国際関係論Ⅰ	国際関係論は国際社会の現象を対象として、紛争・戦争の歴史や構造を解明し、協力による平和の追求を目的とする学問である。人間の営みには連続性があり、歴史を知らずして、現在や未来の国際関係を語ることはできない。「国際関係論Ⅰ」は、国際関係を動かし、その歴史を形成する原理・メカニズムを中心に国際関係の動きを見ていく。とりわけ、グローバリゼーションの展開する中で、国際関係がどのように変動してきたかを解明していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
全学共通科目	選択必修科目	国際関係論Ⅱ	国際関係論は国際社会の現象を対象として、紛争・戦争の歴史や構造を解明し、協力による平和の追求を目的とする学問である。国際社会は、現在大きな変動期を迎えており、従来の国際関係諸現象を理解するための基本概念にもその変化が多く見られる。「国際関係論Ⅱ」は国民国家システム、国家安全保障、国際的相互依存という三つの側面における変容を考察し、諸概念の再検討を行うことによって、国際関係に対立する理解力や分析力を養う。異なった民族、異質な文化・価値観との対立を乗り越え、共生の道を模索し、平和の研究を深めていく。		
		中国研究Ⅰ	「中国研究」は、中国に関心を抱き、中国をもっと知りたい学生を対象とする案内コースである。「中国研究Ⅰ」では、現在中国が直面している国内問題や新たに登場した現象を取り上げ、中国の政治・経済・社会構造について学ぶ。その際に、各問題の現状を知るだけでなく、その歴史的な背景についても考える。現代中国に関する基礎知識や観点を習得することを通じて、中国理解を深める。		
		中国研究Ⅱ	「中国研究」は、中国に関心を抱き、中国をもっと知りたい学生を対象とする案内コースである。現在の中国を理解するには、中国の現代史を知ることが必要となる。なぜなら現在の中国は国際環境や国内情勢の変化に対して講じられたさまざまな試行錯誤の結果、歴史的に形成されたと考えられるからである。「中国研究Ⅱ」では、1945年以降の政治・外交を中心に、中国の歴史的な歩みを学ぶ。		
		東南アジア研究Ⅰ	東南アジアは近年目覚ましい経済発展を遂げ、かつASEANに象徴される地域的統合を進めている。本講義はこうした東南アジアの包括的な理解を目的とする。「東南アジア研究Ⅰ」では、地域の歴史的背景と地理的特質、第二次世界大戦後の歩み、ASEANの結成と進展を取り上げ、また、東南アジア経済を事実上動かしている華僑・華人の役割と中国及び東南アジア各国の華僑政策を検討し、かつ考えていく。		
		東南アジア研究Ⅱ	東南アジアは近年目覚ましい経済発展を遂げ、かつASEANに象徴される地域的統合を進めている。本講義はこうした東南アジアの包括的な理解を目的とする。「東南アジア研究Ⅱ」では、現代の東南アジアを理解するために、東南アジアの特徴について説明をした上で、主要国の政治と経済を中心に現状と課題を考察する。また、日本と東南アジアとの関係、とりわけ日本の政府開発援助(ODA)が東南アジアの開発・発展に与えた影響を検討し、かつ考えていく。		
		文章表現	現在、IT化の波により、パソコン・ワープロが普及し、その結果、ある意味で器用な文章の「書き手」が増えてきている。たしかにこれまで原稿用紙に向かって格闘していた労苦は著しく減少し、氾濫する情報を、手際良くスピーディに処理できるようになった。が、その反面、表現として生み落とされた文章は、いかにも没個性的で、責任主体の不明瞭な平板なものが増えてきていること。これもまた、もう一つの事実である。「文章表現」は、このような現代の状況を視野におさめつつ、個性的で力感あふれる文章づくりを学生に指導していく。大学生活に必要な論文の作成能力を養成するとともに、卒業後の社会における実践的かつ創造的な文章表現能力を身につけさせることを目標とする科目である。		
		情報と社会Ⅰ	現代社会を語る上で情報の視点は不可欠であり、同時に情報は社会の中でとらえなければその特質は見えてこない。そこで、この講義は現代社会と情報の関わりについて幅広い知識をもとに洞察できる素養を身につけることを目的とする。		
		アジアを知る12章	アジアには民主主義国家、社会主義国家、家産制国家、都市国家まで、大小様々で多様なタイプの国々から成っている。それだけでなく歴史や文化も、民族も宗教も実に多様な国家群により構成されている。このような多様で、可能性に満ちたアジアの魅力を学び、アジアへの関心をより一層深めてもらうのが本講義の目的である。ここではアジアの各国や諸問題を理解する上で最も重要と思われるテーマを取り上げて、1回ごと完結の形で授業を進める。		
		選択科目	アラビア語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
			アラビア語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択科目	アラビア語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		アラビア語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		中国語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		中国語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		中国語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		中国語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		ドイツ語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		ドイツ語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		ドイツ語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		ドイツ語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	フランス語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		フランス語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		フランス語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		フランス語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		ヒンディー語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		ヒンディー語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		ヒンディー語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		ヒンディー語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		インドネシア語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		インドネシア語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	



科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択科目	インドネシア語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		インドネシア語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		韓国語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		韓国語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		韓国語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		韓国語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		モンゴル語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		モンゴル語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		モンゴル語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		モンゴル語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	ポルトガル語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		ポルトガル語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		ポルトガル語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		ポルトガル語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		ロシア語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		ロシア語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		ロシア語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		ロシア語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		スペイン語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		スペイン語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択科目	スペイン語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		スペイン語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		タイ語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		タイ語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		タイ語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		タイ語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
		ベトナム語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
		ベトナム語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
		ベトナム語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
		ベトナム語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択科目	英語コミュニケーションⅠ	さまざまな文献、聴覚・視覚教材、コンピューター教材を用いて、英語を聴き取る能力、英語を話す能力を総合的に向上させるためのクラスである。自分の考えや意見を英語で表現する技術を身に付けるためには、積極的に参加することが重要である。多様な形で英語を学習することはAUAPに参加する学生にとっても有益である。	
		英語コミュニケーションⅡ	「英語コミュニケーションⅠ」と同じように、総合的な英語力の向上を目指す。さまざまなテーマを取り上げ、その内容について「英語で」読み、聴き、書き、話すことによって、英語使用に慣れるようにする。AUAPに参加する学生にとっても役に立つと考えられる。	
		英語コミュニケーションⅢ	この授業では異文化間の問題、サバイバルのための会話、アメリカの大学での学習に必要な英語に重点をおいて指導する。英文作法やプレゼンテーション、またディスカッションの技術なども含めて学ぶ。これらは特にAUAPに参加する学生にとっては準備として必要なスタディ・スキルである。	
		英語コミュニケーションⅣ	ある程度のレベルで英語が使用できる学生を対象とするクラスである。その能力の維持と、更に向上させることを目的とする。ディスカッションやライティングなども含まれ、多少高度なレベルで、英語のコミュニケーションが図れるようにする。	
		英語コミュニケーションⅤ	留学などで、ある程度英語使用の経験があり、英語でのコミュニケーションが可能な学生を対象とする。それを更に向上させるために、日常会話のレベルではなく、学術的な場面や職場で必要な英語などを学ぶ。AUAPに参加した学生にも適したクラスである。	
		英語コミュニケーションⅥ	「英語コミュニケーションⅤ」に続いて英語能力の維持を図り、より高度で実践的な英語使用の場面を通して、更にその能力を高めることを目的とするクラスである。AUAPに参加した学生にも適したクラスである。	
		英語コミュニケーションⅦ	上級レベルの受講者を対象として、多様な場面での英語使用を想定し、難度の高い教材を使用して応用力の養成を目指す。オーラル・コミュニケーションを重視する傾向がますます強くなっている現状を踏まえ、実践的な英語使用について学ぶ。	
		英語コミュニケーションⅧ	「英語コミュニケーションⅦ」と同じように、上級レベルのクラスである。言語機能を中心に英語使用に関して分析能力も養えるように段階的に学ぶ。それによってコミュニケーションの構造・機能を理解し、指導の際にも有益な知識を身に付ける。具体的な場面を想定し、それぞれの状況に応じた構文を基礎から応用という段階を踏まえて学び、洗練された表現が使用できることを目指す。	
		中国語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ(前期)では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
中国語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ(後期)も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒にやっていく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。			

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	中国語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ(前期)では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っている。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
		中国語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ(後期)では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
		ドイツ語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ(前期)では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
		ドイツ語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ(後期)も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒に進んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
		ドイツ語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ(前期)では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っている。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
		ドイツ語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ(後期)では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
		フランス語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ(前期)では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
		フランス語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ(後期)も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒に進んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
		フランス語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ(前期)では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っている。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
		フランス語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ(後期)では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	韓国語コミュニケーションⅠ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ(前期)では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	韓国語コミュニケーションⅡ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ(後期)も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒に進んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	韓国語コミュニケーションⅢ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ(前期)では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っていく。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	韓国語コミュニケーションⅣ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ(後期)では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	スペイン語コミュニケーションⅠ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ(前期)では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	スペイン語コミュニケーションⅡ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ(後期)も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒に進んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	スペイン語コミュニケーションⅢ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ(前期)では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っていく。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	スペイン語コミュニケーションⅣ		コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ(後期)では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	American Issues		アメリカの歴史、政治、文化、地理更にビジネスなどについて、文献、地図、講義、録音、ビデオなどを用いて総合的に学ぶ。特にアメリカの南北戦争開始後から現代までを中心に取り上げる。	
	Global Studies		ユネスコのホームページ(UNESCO World Heritage Sites)の中から興味深いものを選び、世界の文化及び環境についてまず考えるきっかけとする。そして現代の多様な問題を考察していく。内容としては民族紛争、国境問題、環境の荒廃、社会問題、先進国の高齢化問題、長期的紛争、世界的な疾病、経済・政治問題として将来の方向性についてなどを取り上げる。語彙力の向上も図ることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	アジアの伝統文化	アジアでは国境ができる前から人々は陸をつたい、海を渡って移動し、それにともなってさまざまな芸能、音楽、文化が広まってきた。そのため、それらの様式には類似性や共通点が多く、その一方でその地域の風土によって生み出されたユニークで、強烈な個性を現すような独自の芸能や音楽も存在している。これらの表現を通してさまざまな社会的・精神的要素を知ることが、その土地やそこに住む人々をより深く理解し、その文化に親しむための重要な一歩となる。特にアジアの音楽を中心に文化の特質と相互関係を解説する。	
		西洋史 I	歴史は単なる史実の連続ではない。史実が歴史家によって分析され、解釈され、叙述されることによって、初めて歴史は成り立つ。この講義では、ヨーロッパ・アメリカの歴史について、「西洋」の持つ象徴的な意味も考えながら、最新の研究成果を参照しつつ学ぶ。社会科学諸分野に取り組む上での知見を養い、深めることがその目的である。「西洋史I」は、古代から近代初期を主な対象として論じる。	
		西洋史 II	歴史は単なる史実の連続ではない。史実が歴史家によって分析され、解釈され、叙述されることによって、初めて歴史は成り立つ。この講義では、ヨーロッパ・アメリカの歴史について、「西洋」の持つ象徴的な意味も考えながら、最新の研究成果を参照しつつ学ぶ。社会科学諸分野に取り組む上での知見を養い、深めることがその目的である。「西洋史II」は、主に近現代を対象として論じる。	
		東洋史 I	本講義は中国を中心とする東アジア世界とその他のアジア諸地域の形成・展開の過程について理解を深め、その文化の独自性と多様性を考察することにより、歴史的思考力を培い、国際社会で主体的に生きる一員として必要な自覚と資質を養うことを目的とする。「東洋史 I」は、アジアにおける古代文明の誕生から近代以前までの政治・経済・社会・文化などを考察し、多様性に富むアジア諸地域の歴史を多面的に理解することを目的とする。	
		東洋史 II	本講義は中国を中心とする東アジア世界とその他のアジア諸地域の形成・展開の過程について理解を深め、その文化の独自性と多様性を考察することにより、歴史的思考力を培い、国際社会で主体的に生きる一員として必要な自覚と資質を養うことを目的とする。「東洋史 II」は、近現代におけるアジア諸地域の政治・経済・社会・文化などを考察し、グローバルな歴史展開の中でアジア諸地域がいかに変容し、現代の国際社会を形成するに至ったかを、多面的に理解することを目的とする。	
		日本史 I	戦争体験者が希少となり、平和が自明のことと思われがちな今日、戦争について語り、研究することも、とかく忌避されがちである。しかし、わが国の過去の行為をどう評価するにせよ、戦争の原因とその経過、更には当時の社会情勢を知らずしては何も語ることができないはずである。日本史 I では、帝国主義時代と日本の開国、日清・日露戦争を振り返り、今日の日本を知るための手がかりとする。「すべての歴史は現代史である」(B.クローチェ)ことを踏まえて近・現代史を考察する。  【留学生クラス】 高等学校で日本史が選択になってしまったために、日本史を学ぶ機会が減少しつつある。しかし、日本の文化・歴史に対する理解を深めることは、みずからのアイデンティティを確立するためにも重要であろう。「日本史 I D組(留)」では、前近代の日本列島を舞台に、そこで繰り広げられた歴史を、テーマ毎に多角的に捉えなおしていきたい。	
		日本史 II	戦争体験者が希少となり、平和が自明のことと思われがちな今日、戦争について語り、研究することも、とかく忌避されがちである。しかし、わが国の過去の行為をどう評価するにせよ、戦争の原因とその経過、更には当時の社会情勢を知らずしては何も語ることができないはずである。日本史 II では、改めて昭和の戦争を考え、現代日本を理解する手がかりとしたい。「すべての歴史は現代史である」(B.クローチェ)ことを踏まえて近・現代史を考察する。  【留学生クラス】 高等学校で日本史が選択になってしまったために、日本史を学ぶ機会が減少しつつある。しかし、日本の文化・歴史に対する理解を深めることは、みずからのアイデンティティを確立するためにも重要であろう。「日本史 II D組(留)」では、前近代の日本列島を舞台に、そこで繰り広げられた歴史を、テーマ毎に多角的に捉えなおしていきたい。	
		中国語応用 I	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。I (前期)では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		中国語応用 II	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。II (後期)では、I と同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	中国語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ(前期)では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		中国語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ(後期)も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		ドイツ語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ(前期)では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		ドイツ語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ(後期)では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		ドイツ語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ(前期)では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		ドイツ語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ(後期)も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		フランス語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ(前期)では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		フランス語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ(後期)では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		フランス語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ(前期)では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		フランス語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ(後期)も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	



科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択科目	韓国語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ(前期)では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		韓国語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ(後期)では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		韓国語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ(前期)では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		韓国語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ(後期)も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		ロシア語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ(前期)では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		ロシア語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ(後期)では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		ロシア語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ(前期)では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		ロシア語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ(後期)も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
		スペイン語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ(前期)では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
		スペイン語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ(後期)では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	スペイン語応用Ⅲ		一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ(前期)では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	スペイン語応用Ⅳ		一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ(後期)も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	海外語学実習Ⅰ		海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
	海外語学実習Ⅱ		海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
	海外語学実習Ⅲ		海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
	海外語学実習Ⅳ		海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
	教養基礎(歴史からみた異文化交流)		この科目は、一般教育・語学・体育など主として教養教育を担当する教員が、ゼミ形式で行う少人数授業の科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについての通常の講義科目とは一味違う、非常に幅広く多様で教員とより密着した授業が期待できる。	
	教養基礎(Urban Problems and Urban Planning)		この科目は、一般教育・語学・体育など主として教養教育を担当する教員が、ゼミ形式で行う少人数授業の科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについての通常の講義科目とは一味違う、非常に幅広く多様で教員とより密着した授業が期待できる。	
	Doing History I		<p>“History” is not just a sequence of historical facts, but the product of historians’ various interpretations and perspectives. This course is designed more for “doing” history by reconsidering historiography from critical viewpoints through active discussions rather than just “learning” history. Learning through key debates, we discuss various historical topics in the course -Doing History I mainly focuses on historiography from ancient to early modern times.</p> <p>「歴史」とは、単なる歴史的事実の羅列ではなく、歴史家の様々な解釈や視点の産物である。このコースでは、歴史を「学ぶ」というよりも、歴史学を批判的な視点からとらえ直し、活発な議論を通じて歴史を「学ぶ」ことを目的としている。歴史学Ⅰでは、主に古代から近世にかけての歴史学について学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	Doing History II		<p>“History” is not just a sequence of historical facts, but the product of historians’ various interpretations and perspectives. This course is designed more for “doing” history by reconsidering historiography from critical viewpoints through active discussions rather than just “learning” history. Learning through key debates, we discuss various historical topics in the course-Doing History II mainly focuses on historiography from modern to contemporary times.</p> <p>「歴史」とは、単なる歴史的事実の羅列ではなく、歴史家の様々な解釈や視点の産物である。このコースは、歴史を「学ぶ」というよりも、歴史学を批判的な視点から捉え直し、活発な議論を通じて「歴史を行う」ことを目的としている。歴史学IIでは、主に近現代の歴史学について学ぶ</p>	
	アメリカン・スタディーズ I		<p>本科目では、アメリカの歴史について、この国の文化、政治、社会がどのように変遷してきたのかを学ぶ。ここではまずアメリカ文化のルーツを考え、歴史的な出来事やどのように現代の社会、経済、政治や環境面における価値観に反映されているのかを検証していく。</p>	
	アメリカン・スタディーズ II		<p>本科目では、アメリカ社会について多様な視点から考察していく。専門的な内容を学ぶために学部科目担当の教授の講義にも参加し、ノートテーキングなどの学習方法も取り入れていく。</p>	
	アジアン・スタディーズ I		<p>本科目では、近年著しく発展を遂げ、その存在感を増している「アジア」に焦点をあて、アジア諸国の歴史・社会・文化などについて基礎的な知識を英語で学ぶことを目的とする。アジア諸国がどのような歴史の変遷を経て、現在のような国家体制となったのか、またそれがどのように社会・文化に反映されているかを現地での体験を通して学び、「アジア」についての理解を深めることが目標である。</p>	
	アジアン・スタディーズ II		<p>本科目では、近年著しく発展を遂げ、その存在感を増している「アジア」に焦点をあて、アジア諸国の政治・経済・外交などについて基礎的な知識を英語で学ぶことを目的とする。現在のアジア諸国がどのように形作られているかを理解するために、政治制度や行政機構について学ぶ。さらに経済面での成長や諸外国との関係、同じアジア圏内諸国との貿易についても学び、アジア地域経済の現状を理解することをめざす。</p>	
	中級日本語 I		<p>日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。</p> <p>この科目では、文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。</p>	
	中級日本語 II		<p>日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。</p> <p>この科目では、講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。</p>	
	中級日本語 III		<p>日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。</p> <p>この科目では、社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。</p>	
	中級日本語 IV		<p>日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。</p> <p>この科目では、「日本語 I」を受け、より高度な文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。</p>	
中級日本語 V		<p>日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。</p> <p>この科目では、「日本語 II」を受け、より難易度の高い講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。</p>		

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	中級日本語Ⅵ		日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅲ」を受け、より難易度の高い社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。	
	上級日本語Ⅰ		留学生が日本で希望する職業に就きよりよい社会生活を営むためには、日本語能力試験N1に合格するのみならず、高得点の取得を目指し能力の向上に努め、その能力を活用することが求められる。 この科目は、日本語学習でN1レベルに到達した留学生を対象に、学習を続けることにより一層の能力の向上を図り、将来必要となる上級の日本語能力を養うための科目である。春学期は、N1で100～120点を取得することを目標に、文法・読解を中心に学習する。	
	上級日本語Ⅱ		留学生が日本で希望する職業に就きよりよい社会生活を営むためには、日本語能力試験N1に合格するのみならず、高得点の取得を目指し能力の向上に努め、その能力を活用することが求められる。 この科目は、日本語学習でN1レベルに到達した留学生を対象に、学習を続けることにより一層の能力の向上を図り、将来必要となる上級の日本語能力を養うための科目である。秋学期は、N1で110～140点を取得することを目標に、文法・読解を中心に学習する。	
	上級日本語Ⅲ		3, 4年生次にゼミで論文を執筆する際には、日本語で内容や構成について考え準備し、適切な表現を用いて執筆することが求められる。前期・後期を通じて論文作成について学ぶ科目であるが、まずこの科目では、論文執筆の技術を学びながら、ゼミに積極的に参加し、担当教師や友人に自分の論文について語るができることを目標とする。	
	上級日本語Ⅳ		3, 4年生次にゼミで論文を執筆する際には、日本語で内容や構成について考え準備し、適切な表現を用いて執筆することが求められる。前期・後期を通じて論文作成について学ぶ。 この科目では、「上級日本語Ⅲ」で学んだ論文作成の技術を確実に用いて、実際にゼミの論文の執筆を進める。	
	西洋文学Ⅰ		西洋文学について歴史的背景を視野に入れて概観し、散文芸術の発生からその発展過程をたどり、20世紀につながる流れを代表的な作品を通して論述する。特にギリシア、イギリス、フランス、ドイツ等の代表的文学作品を通して、作品の鑑賞とその時代背景、作家の思想、及び人間洞察、神話・伝説との関連、作品の芸術性等を考察する。歴史的な経緯、例えばギリシア悲劇からシェイクスピア劇へと続く演劇の歴史や、地域的な特徴、例えばフランス文学に一貫している「モラリスト文学」と「心理小説」に着目しながら作家の感覚や心理、そして人間描写の巧みさ等の理解を図る。「西洋文学Ⅰ」では、上記の内容からいくつかを取り上げて講義する。	
	西洋文学Ⅱ		西洋文学について歴史的背景を視野に入れて概観し、散文芸術の発生からその発展過程をたどり、20世紀につながる流れを代表的な作品を通して論述する。特にギリシア、イギリス、フランス、ドイツ等の代表的文学作品を通して、作品の鑑賞とその時代背景、作家の思想、及び人間洞察、神話・伝説との関連、作品の芸術性等を考察する。歴史的な経緯、例えばギリシア悲劇からシェイクスピア劇へと続く演劇の歴史や、地域的な特徴、例えばフランス文学に一貫している「モラリスト文学」と「心理小説」に着目しながら作家の感覚や心理、そして人間描写の巧みさ等の理解を図る。「西洋文学Ⅱ」では、「西洋文学Ⅰ」で扱ったものとは異なる時代、異なる地域について講義する。	
	中国文学Ⅰ		3000年近い歴史のある中国文学は、近代に至るまで外国からの影響をほとんど受けずに独自の発展を遂げてきた。まず文学の担い手が政治家(政治家志望者も含む)とその周縁に位置する人間にほぼ限定されており、また一言で「詩」や「小説」と言っても、そこには他国の文学には見られない特徴が存在する。「中国文学Ⅰ」ではそうした中国文学の特異性を踏まえつつその発展の歴史を概観し、著名な文学者とその代表作を鑑賞することで中国文学についての理解を深めるものとする。	
	中国文学Ⅱ		3000年近い歴史のある中国文学は、近代に至るまで外国からの影響をほとんど受けずに独自の発展を遂げてきた。まず文学の担い手が政治家(政治家志望者も含む)とその周縁に位置する人間にほぼ限定されており、また一言で「詩」や「小説」と言っても、そこには他国の文学には見られない特徴が存在する。「中国文学Ⅱ」では「中国文学Ⅰ」から対象を変えて、中国文学の特異性を踏まえつつその発展の歴史を概観し、著名な文学者とその代表作を鑑賞することで中国文学についての理解を深めるものとする。	
	ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ		ヨーロッパの芸術と文化は現代を生きる我々の考え方と感じ方に大きな影響を与えている。これを学ぶことは我々が生きる世界と我々自身を知るために必要であり、また、我々の知性と感性を高めることにも貢献してくれるはずである。さらに、ヨーロッパの文化理解を根底に置いたヨーロッパ芸術の受容は、受講者各自にとって純粋な愉しみ、人生における持続的な感動の源泉ともなりうるものである。本科目は、その可能性を見出す、あるいは広げるための端緒となるであろう。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	ヨーロッパの芸術と文化Ⅱ		「ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ」を発展させ、受講者がヨーロッパの芸術を自発的に享受することができるようにする。「ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ」で学んだ、ヨーロッパの文化的背景の理解をもとに、受講者自身が芸術作品を(自己流ではなく)的確に味わい、芸術を通じた美的体験・思想的体験を深化させる。この科目を通じ、芸術鑑賞が本来の意味での生涯学習であり、芸術との関わりを持つことは人生をより愉しく、そして豊かにしてくれることを実感できるようにする。	
	創造の世界Ⅰ(ことばとイメージ・ネーション)		想像する力。想像したものを具体的な形にするための手段・方法。必要に応じて他者との協力関係を作り上げる組織力。そして、その過程に間違いなく生じる試行錯誤への覚悟と乗り越えるバイタリティ。創造とはこれらの総合であることを理解することを目的とする。そのために、「創造の世界Ⅰ」は「ことば」による創作について現代日本文化の創造の最前線に位置すると思われる作品や人物を取りあげ、その具体的な紹介と分析を行う。	
	創造の世界Ⅱ(アニメーションの世界)		想像する力。想像したものを具体的な形にするための手段・方法。必要に応じて他者との協力関係を作り上げる組織力。そして、その過程に間違いなく生じる試行錯誤への覚悟と乗り越えるバイタリティ。創造とはこれらの総合であることを理解することを目的とする。そのために、「創造の世界Ⅱ」は「映像」「舞台」などで、現代日本文化の創造の最前線に位置すると思われる作品や人物を取り上げ、創造過程の具体的な紹介と分析を行う。	
	日本の表象文化		本科目では、主に近代以降に生み出された日本語による「書きことば」(エクリチュール)とその文化表象について、具体的なテキストに即しつつ考察する。ここには当然文学作品は含まれるが、美術や写真、音楽、放送、広告のコピーや社会的・政治的標語などのような、これまで文学には分類されてこなかった表現の数々もとり上げていく。近現代の日本において、人々の知性や心性、感覚や価値観、ふるまいや行動などを形づくり、またこれらに多面的に作用していったさまざまな文化表象を読み解くことを、授業の目的とする。	
	日本文学(中古)		近代以前の日本文学、すなわち日本の古典文学について、社会人として必要十分な教養や知識を授ける科目である。日本文学史(古典)は上代・中古・中世・近世と時代区分されるが、ここではおもに中古(平安時代=およそ9-12世紀)の作品を対象とする。 中古文学は、かな(平仮名)による表現、和歌の隆盛、物語文学の多作によって特徴づけられる。これらのなかから著名な古典作品を作り上げ、読解するとともに、同時代の思想や文化、風俗についての理解と考察を深める、単に文章の通釈をおこなうのみならず、そこに内包される歴史性や現代性をも読み解く講義になる。	
	日本文学(中世)		近代以前の日本文学、すなわち日本の古典文学について、社会人として必要十分な教養や知識を授ける科目である。日本文学史(古典)は上代・中古・中世・近世と時代区分されるが、ここではおもに中世(鎌倉時代=およそ13-14世紀、室町時代=およそ15-16世紀)の作品を対象とする。 中世文学は、前代にひき続き韻文(和歌・連歌)と散文(物語)を二本柱としながら、古典研究や芸能の方面にも展開を示した。これらのなかから著名な古典作品を取り上げ、読解するとともに、同時代の思想や文化、風俗についての理解と考察を深める、単に文章の通釈をおこなうのみならず、そこに内包される歴史性や現代性をも読み解く講義になる。	
	日本文学(近世)		近代以前の日本文学、すなわち日本の古典文学について、社会人として必要十分な教養や知識を授ける科目である。日本文学史(古典)は上代・中古・中世・近世と時代区分されるが、ここではおもに近世(江戸時代=およそ17-19世紀)の作品を対象とする。 近世文学は、都市の発達と本格的な出版の開始を背景として、同時代の韻文や散文、演劇はもちろん、国学や舌耕(落語等)の分野も開拓し、集積した古典の各ジャンルをも受け継ぎ、多彩な様相を示した。これらのなかから著名な古典作品を取り上げ、読解するとともに、同時代の思想や文化、風俗についての理解と考察を深める、単に文章の通釈をおこなうのみならず、そこに内包される歴史性や現代性をも読み解く講義になる。	
	日本文学(近現代)		日本は中国大陸・朝鮮半島をはじめとする他国との文化接触によって、自国の文化を多様で豊かなものとして育て上げてきた。明治維新以降は、これに欧米諸国との関係が加わり、近代化のなかで日本文化は複雑な色合いをもつに至る。特に20世紀以降、文学という文化表象は、近代化のもとで格闘する人々の心性や知性の表現の器として形成され、新聞・雑誌・書物などの媒体を通して読者に提供されてきた。「日本文学(近現代)」は、主に明治期以降の近代から現代に至る文学を、上記の観点から分析し、21世紀を生き抜くヒントを得ることを目的とする。	
	文章作成技法		インターネットが普及し、誰もが容易に情報を手に入れられる時代になった。だが、日々更新され増殖する膨大な情報量を前にして、われわれ現代人は、時にその取り扱いに窮し、なす術なく立ち止まることすらある。「文章作成技法」は、そのような情報洪水(Information Pollution)の時代において、受講者である学生たちがどのようにして情報を収集し、それら情報の適否を判断したら良いか、また、各情報の有用性・有益性をどのようにして分析すべきかを学び、それら一連の学修成果としての発展的レポートを作成する科目である。文章作成の基礎を踏まえた上で、より発展・応用的な文章技法の能力を備えることはもちろん、卒業後に参加する社会や組織、ビジネスの現場において、主体的な思考力・企画力・創造力を備えた社会人となるための地力を養う科目として位置付けられる。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	表現とメディア I		表現が社会や文化を形づくりにあたって果たしている役割は、思いのほか大きい。それはその社会や文化の中で生きる人々の思考や感覚・欲望まで作り出している場合があり、現代に生きる私たちにとって、見逃せない問題である。「表現とメディア I」では、主に言語による表現を中心に取り上げるが、歴史や社会と表現を別々に捉えるのではなく、それらの関係のあり方や、そこから生み出されてくるものを複合的に問題にしている。個々の表現が相異なる時代状況とさまざまな関わり合いながら示す多彩なはたらきを捉え、それらを多角的に考察することが、この科目の目的である。	
	表現とメディア II		表現が社会や文化を形づくりにあたって果たしている役割は、思いのほか大きい。それはその社会や文化の中で生きる人々の思考や感覚・欲望まで作り出している場合があり、現代に生きる私たちにとって、見逃せない問題である。「表現とメディア II」では、言語による表現に加え、画像・映像表現もより積極的に取り上げる。その場合でも、表現・メディア状況・歴史・社会を別々に捉えるのではなく、それらの関係のあり方と、そこから生み出されてくるものを複合的に問題にする。個々の表現が相異なる時代状況とさまざまな関わり合いながら示す多彩なはたらきを捉え、それらを多角的に考察することが、この科目の目的である。	
	詩と詩論		本科目では、日本の近現代詩、短歌、俳句を対象に、その鑑賞及び理論的考察を行う。詩言語における音声、リズム、隠喩、象徴、異化等のさまざまな技法を分析・考察するとともに、作品はもちろん著名な詩人についての理解も進め、さらに詩の歴史や優れた詩人を輩出した同時代の文化を多面的に学ぶ。現代の文化・言語の状況を視野におさめつつ、実践的に21世紀にふさわしい新しい「詩学」を学習する。	
	日本の伝統芸能		国際社会で自己の立場を確立するにあたり、基盤となるのは自身のよって立つ文化への広範な理解である。この観点から、本科目では日本の伝統芸能について学ぶ。伝統芸能は広くは絵画、工芸、茶道、華道などの芸道や民俗芸能なども含み、狭義には能・狂言、人形浄瑠璃・歌舞伎などの舞台芸術を指す。日本の伝統芸能の素養を身につけることにより、多様な文化に直面しても翻弄されることなく自立性を保ち、グローバル化された現代社会を生き抜くための一助としてほしい。	
	日本の美術		日本の美術の発生は、先史古墳時代の土器に認められます。続く奈良時代は中国文化の受容で知られ、その流入が止む平安期の王朝時代にはいわゆる国風文化が栄えます。武士に政権が移った鎌倉時代には再び大陸の影響をうけます。室町時代とその後の動乱を経て、江戸時代に入ると鎖国政策がとられますが、徳川幕府の安定した治世下に豊かな町民文化が開花しました。そして近代に到達すると＜美術＞にも明治維新が起こります。 しなやかにしたたかに外来文化との交流を続けた日本美術は、どのような形象を創り出してきたのでしょうか。また西欧近代との直面という衝撃にさらされたとき、どのような変貌を遂げたのでしょうか。この授業では、美術を通して日本の文化と創造力への理解を深めます。	
	教養基礎(近現代日本の文化と表現)		この科目は、一般教育・語学・体育など主として教養教育を担当する教員が、ゼミ形式で行う少人数授業の科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについての通常の講義科目とは一味違う、非常に幅広く多様で教員より密着した授業が期待できる。	
	教養基礎(現代文学入門)		この科目は、一般教育・語学・体育など主として教養教育を担当する教員が、ゼミ形式で行う少人数授業の科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについての通常の講義科目とは一味違う、非常に幅広く多様で教員より密着した授業が期待できる。	
	教養基礎(チェスと文学)		この科目は、一般教育・語学・体育など主として教養教育を担当する教員が、ゼミ形式で行う少人数授業の科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについての通常の講義科目とは一味違う、非常に幅広く多様で教員より密着した授業が期待できる。	
	教養基礎(理論で読む現代文学)		この科目は、一般教育・語学・体育など主として教養教育を担当する教員が、ゼミ形式で行う少人数授業の科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについての通常の講義科目とは一味違う、非常に幅広く多様で教員より密着した授業が期待できる。	
教養基礎(多様性とアートの教育学)		この科目は、一般教育・語学・体育など主として教養教育を担当する教員が、ゼミ形式で行う少人数授業の科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについての通常の講義科目とは一味違う、非常に幅広く多様で教員より密着した授業が期待できる。		

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	経済学Ⅰ		ミクロ経済学の基礎事項について学習する。ミクロ経済学の基本的道具は需要と供給という概念であるが、それらがどう決定され、結果として様々な市場において価格がどのように決定されるかについて理解することを目的とする。また、様々な経済現象を需要と供給という道具でどのように理解できるか、更に規制がどのように市場に影響するか、についても学習する。	
	経済学Ⅱ		マクロ経済学の基礎事項について学習する。主として国民所得とは何か、それどのように決定されるのか、また利子率と国民所得はどのように関係しているかについて学習する。ビジネスを行ううえで景気動向などを知ることは必須であると思われるので、景気などのマクロ経済指標とその読み方についての基本的理解も目的としている。	
	現代教養特講		武蔵野市寄付講座は、市内の各大学において、市民が学生とともに大学の研究成果を学ぶことができるように設けられた特設講座である。国や地域のさまざまな課題について、市民の視点と学生の視点を交えつつ、多角的な考察を行うことを目的とする。特に、社会科学系総合大学である本学の特色を生かして、国や地域の直面する喫緊の課題に対し学際的なアプローチを試み、総合的な理解が得られるよう努める。	
	災害救援活動論		地震国の日本で災害に対する基礎的な知識と実際に役立つ対処技能を持つことは、21世紀の市民の教養の1つとなる。災害時にまず自分の身の安全を確保する態度と方法を学ぶ。次に、負傷者の手当をするために上級救命講習(8時間)を学び上級救命技能認定証を取得する。さらに、救命技能の復習、防災器具操作訓練、災害援助シミュレーションを行うことを通じて、救命講習で学んだことを振り返り、知識や技能のブラッシュアップを図り、地域社会における防災及び災害援助のための実践的知識を深める。	
	社会思想史Ⅰ		社会思想史とは人間が社会の中で生き、行動するために認識しなくてはならない社会の総体的把握であり、社会認識、社会改革、社会通念の思想である。しかしそれは文化伝統、政治思想や宗教思想、哲学的世界観、科学思想、文芸思潮などの認識を抜きにしては語れないから必然的にそれらを包含することになる。社会批判、伝統批判、社会革新の思想の歴史である社会思想史は、したがって、時代が進むにつれ、また社会が異なるにつれ、各時代、各社会の社会思想史が成立することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたので、西欧の社会思想と日本の社会思想との比較思想が必要となり、「社会思想史Ⅰ」では西洋の社会思想を中心に論ずる。	
	社会思想史Ⅱ		社会思想史とは人間が社会の中で生き、行動するために認識しなくてはならない社会の総体的把握であり、社会認識、社会改革、社会通念の思想である。しかしそれは文化伝統、政治思想や、宗教思想、哲学的世界観、科学思想、文芸思潮などの認識を抜きにしては語れないから必然的にそれらを包含することになる。社会批判、伝統批判、社会革新の思想の歴史である社会思想史は、したがって、時代が進むにつれ、また社会が異なるにつれ、各時代、各社会の社会思想史が成立することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたので、西欧の社会思想と日本の社会思想との比較思想が必要となり、「社会思想史Ⅱ」では日本の社会思想を中心に論ずる。	
	宗教学Ⅰ		宗教を学ぶ上で重要なことは、それが個人の幸福や国家・民族社会の安定にどのように貢献しているかを理解することである。今日、宗教が個人の精神活動や民族社会を支える理念として、きわめて重要であることを認識している人は少なくない。「宗教学Ⅰ」では世界宗教といわれる仏教、キリスト教、イスラム教の基本的教義と歴史を中心に解説する。	
	宗教学Ⅱ		「宗教学Ⅱ」では、「宗教学Ⅰ」で取り上げた世界宗教といわれる仏教、キリスト教、イスラム教の基本的教義と歴史の解説を前提に、それが時代的、地域的のどのような影響を与えたか、そして、「そもそも宗教は人間にとって何なのか」という人間中心の視点も踏まえて総合的に宗教を考察することを目的とする。	
	女性学		価値観の多様化に伴うモラル喪失が問題にされる一方、社会的には少子高齢化がかなりの勢いで進む現代において、男女が互いの人格を尊重して共生することは重要な課題である。「女性学」は、男女共生の観点から、青年期に遭遇する恋愛・結婚・出産・育児などの問題を、近年の法律及び論争などを参照して、個人的なレベルから社会的なレベルまでの幅で考察することを目的とする。	
	政治学Ⅰ		「政治学Ⅰ」は専門科目ではなく、政治学を初めて学習するための科目である。その学習の内容は主として、(1)様々な社会現象の中で政治とはどのような特徴をもち、どのような役割を果たしているのかということであり、(2)政治の主要な担い手にはどのようなものがあり、それがどのような役割を果たしているかということであり、(3)現代政治の主要な制度や体制の特徴を理解することである。主として政治のミクロ的側面を対象とし、個人や集団の主張や政治参加という「政治過程」を対象とする。	
政治学Ⅱ		「政治学Ⅱ」は「政治学Ⅰ」と同様専門科目ではなく、政治、特に現代政治を理解するために最小限必要な知識や理論を学習することを目的とするものである。主として政治のマクロ的側面を対象とし、政治権力の側からの「統治過程」を対象とすることになる。		

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	地誌学Ⅰ	人間の諸活動は地域社会と密接に関わっている。地誌学は、一般地理学とは異なり、限られた地域の文化・自然の全ての要素を調べ、地域的特性を明らかにする部門である。自然分野の観点からだけでなく、我々の先人たちがどのようにして地域に適合した生活・文化を作り上げてきたのかを、人文・歴史・社会などの各方面の学問と重ね合わせながら、地域と地域に土着した生活文化について論じる。「地誌学Ⅰ」では、上記の内容からいくつかを取り上げ、解説する。	
		地誌学Ⅱ	人間の諸活動は地域社会と密接に関わっている。地誌学は、一般地理学とは異なり、限られた地域の文化・自然の全ての要素を調べ、地域的特性を明らかにする部門である。自然分野の観点からだけでなく、我々の先人たちがどのようにして地域に適合した生活・文化を作り上げてきたのかを、人文・歴史・社会などの各方面の学問と重ね合わせながら、地域と地域に土着した生活文化について論じる。「地誌学Ⅱ」では、「地誌学Ⅰ」で取り上げた以外の内容について解説する。	
		日本思想史Ⅰ	日本思想史は、日本思想すなわち日本の文化伝統の歴史であり、歴史的に形成されてきた日本の社会と文化を、歴史学、宗教学、美術史学、神話学、文学、民俗学、文化人類学などの研究成果に立って問題にする。しかも文化伝統を離れては、真に実り豊かな思想や文化の創造はありえないから、「深い泉の国」(インモース神父)の文化学としての日本思想史は、古代日本から現代日本までの、文化伝統の創造的発展の系譜を追求することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたから、一般に、日本思想史は幕末明治維新までを扱う「日本思想史」とそれ以降の政治指導者・知識人・民衆の政治社会思想から文化論までを扱う「近代日本思想史」とに分かれる。「日本思想史Ⅰ」は主として幕末明治維新までを論ずる。	
		日本思想史Ⅱ	日本思想史は、日本思想すなわち日本の文化伝統の歴史であり、歴史的に形成されてきた日本の社会と文化を、歴史学、宗教学、美術史学、神話学、文学、民俗学、文化人類学などの研究成果に立って問題にする。しかも文化伝統を離れては、真に実り豊かな思想や文化の創造はありえないから、「深い泉の国」(インモース神父)の文化学としての日本思想史は、古代日本から現代日本までの、文化伝統の創造的発展の系譜を追求することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたから、一般に、日本思想史は幕末明治維新までを扱う「日本思想史」とそれ以降の政治指導者・知識人・民衆の政治社会思想から文化論までを扱う「近代日本思想史」とに分かれる。「日本思想史Ⅱ」は主として近代日本思想史を論ずる。	
		文化人類学Ⅰ	文化人類学は、人の営みである文化現象の分析を通して「文化」、更に「人類」とは何かを追及する学問である。研究対象となる領域には、婚姻、家族、親族、民族、社会といった組織の構造とそこで繰り広げられる、経済、政治、法、宗教、儀礼といった文化の形態が含まれる。フィールドワークという実証的手法によって世界のさまざまな集団の文化を比較し、異文化に対する理解力を養うことを目的とする。「文化人類学Ⅰ」ではこの中からいくつかを取り上げ、解説する。	
		文化人類学Ⅱ	文化人類学は、人の営みである文化現象の分析を通して「文化」、更に「人類」とは何かを追及する学問である。研究対象となる領域には、婚姻、家族、親族、民族、社会といった組織の構造とそこで繰り広げられる、経済、政治、法、宗教、儀礼といった文化の形態が含まれる。フィールドワークという実証的手法によって世界のさまざまな集団の文化を比較し、異文化に対する理解力を養うことを目的とする。「文化人類学Ⅱ」ではⅠで扱わなかった内容の中からいくつかを取り上げ、解説する。	
		法学Ⅰ	初めて法律学を学ぶ学生諸君に法律学に対する興味や関心をもってもらい、基本的な法原則・法概念そして法の適用(解釈)などを習得してもらうことが、本講義の目的である。主に民事法に関連した具体的な事例や判例を教材に用いて、市民感覚、自らの考え、意見などと照らし合わせながら法的な問題解決に接近していくための基礎を学ぶ。	
		法学Ⅱ	初めて法律学を学ぶ学生諸君に法律学に対する興味や関心をもってもらい、基本的な法原則・法概念・法解釈などを習得してもらうことが、本講義の目的である。主に刑事法に関連した具体的な事例や判例を教材に用いて、自らの考え、意見、感覚などと照らし合わせながら法的な問題解決に接近していくための基礎を学ぶ。	
		建学の精神を考える	亜細亜大学の歴史、教育理念、建学の精神等を学び、大学で学ぶ意味を考える。主に初代学長太田耕造先生の思想を学び、その教育への志を理解する。そして、受講生同士で話し合い、グループワークをする中で、受講生が亜細亜大学で学ぶ自分なりの意味を見だし、四年間の主体的な学びへと踏み出す場とする。	
		哲学Ⅰ	古来以来、諸学問の起源として座してきた哲学。近代以降も諸学の主人として任されてきた哲学が、現代の科学技術主義化の中でいかなる役目と位置を持ちうるか。今日の行きすぎた諸学が生み出す科学主義の悪しき側面を、総合的な視点から正していくことが哲学に課せられた課題であるといえる。この科目では、科学技術の諸現象を挙げながら、哲学の「総合」としての役割を考える。	



科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	哲学Ⅱ	現代ほど「人間」という概念があいまいになりつつある時代はないかもしれない。「人間」の地位と、その復権という視点から、哲学史の中で変遷してきた「人間」の概念を明らかにしつつ、現代における「人間」の意味を明らかにし、今後われわれが対処すべき哲学的課題に迫ることを目的とする。	
		倫理学Ⅰ	「よく生きること」についての自覚的反省を試み、受講生に自分なりの道徳的価値についての準拠枠を自覚させ、受講生同士の討論を通じて、異なる準拠枠に対する理解を深めることを目的とする。文学部ではないので、学説史的な内容は最小限にとどめ、以下のような分野に関わる同時代的課題のいくつかを取り上げて、そのトピックスを中心に、道徳的な認識と善悪の判断のあり方を考察する。生命倫理、環境倫理、戦争と平和、法と道徳、宗教と道徳、経済倫理、幸福論等。	
		倫理学Ⅱ	「よく生きること」についての自覚的反省を試み、受講生に自分なりの道徳的価値についての準拠枠を自覚させ、受講生同士の討論を通じて、異なる準拠枠に対する理解を深めることを目的とする。文学部ではないので、学説史的な内容は最小限にとどめ、以下のような分野に関わる同時代的課題の内、「倫理学Ⅰ」で取り上げなかったトピックスを中心に、道徳的な認識と善悪の判断のあり方を考察する。生命倫理、環境倫理、戦争と平和、法と道徳、宗教と道徳、経済倫理、幸福論等。	
		心とからだの健康学	心身の状態が良好で充実した日常生活を送ることは、大学生活における勉学やクラブ活動などで各人の可能性を最大限に伸ばすための必須条件である。また、卒業後の社会生活でも、個人の能力や特性を最大限に発揮して活躍するための基礎となるものである。「心とからだの健康学」では食事と栄養、健康的な睡眠法、身体活動の重要性、肥満の予防法、生活習慣病の予防法、メンタルケアなど幅広い内容からいくつかを取り上げて、健康に暮らすために必要な知識を、実学として科学的・体系的に理解する。	
		スポーツ実習	多くのスポーツは生涯にわたって楽しむことができ、趣味や生きがいとして非常に有意義な活動である。スポーツ実習では生涯スポーツにふさわしい様々な種目や体力トレーニングのクラスを開講して授業を展開する。毎回の授業では、身体活動を行ってスキルや身体能力の向上を目指すだけでなく、ルール、審判法、試合進行の知識など生涯スポーツ実践の素養を修得する。更に、視覚教材による技術分析、傷害の予防法、コンディショニング法、トレーニング理論、スポーツ栄養学など、質の高いスポーツ活動に必要な不可欠なスポーツ科学の理論についても大学レベルでの理解を深める。	
		スポーツ科学概論	スポーツ科学は、人文・社会科学から自然科学まで多岐にわたる分野で構成されている。この科目では、スポーツを様々な視点から科学的に捉え、スポーツ科学の基礎知識についての理解を深めることを目的とする。	
		救急処置・予防法	スポーツを行う者にとって救命・救急処置法は必須の知識である。この科目では、日常あるいはスポーツ現場特有の救命、救急処置に必要な知識や具体的な方法を概説し、実際に対応可能となることを目的とする。また、障害の予防方法についての理解も深める。	
		スポーツ心理学	スポーツ心理学は、スポーツにおける心理的諸問題について研究する応用科学分野の学問である。この科目では、スポーツの場面にみられる心理的問題、その予防や対処の方法など、スポーツにおける「心」についての理解を深めることを目的とする。	
		スポーツ生理学	スポーツ生理学は、生理学(ヒトの身体機能について探求する)の応用領域である。この科目では、身体運動を行なった際に生体内で生じている変化を、細胞、組織、器官、器官系など様々な視点から概観し、その現象としくみについて探求していくことを目的とする。	
		人体の構造と機能	この科目は、人体の構造と機能の基礎的な内容を理解し、私たちの日常生活においてそれらを役立てることができる能力を育成するものである。この科目の学問的な基礎となるものは、「解剖学」と「生理学」である。これらが扱う基礎的事項を、日々暮らしている私たち自身に当てはめて関連付けながら理解することで、自身の健康状態を正しく観察し、生活に科学的な視点を持つことができるようになる。	

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通科目	選択科目	スポーツトレーニング論	この科目では、トレーニングの諸要素と原理・原則を理解し、筋力、パワー、スピード、持久力などを維持・向上させる具体的なトレーニング方法を学ぶことを目的とする。さらにスポーツ種目別のトレーニング方法を検証する。	
		スポーツの技術と戦術	スポーツ技術の分析及びトレーニング方法を理解し、さらにゲームにおける各種スポーツの競技力向上における戦術理論を紹介する。さらに各スポーツ種目別の技術・戦術を検証する。	
		スポーツの測定と評価	指導者が安全かつ効果的な指導を行うためには、指導対象の形態的特徴、技術・体力レベルを正確に把握する必要がある。また、競技者自身も把握することで、自己の身体的特徴についてより理解が深まる。この科目では、形態計測や体力測定とデータ分析、評価の意義、各種測定、分析、評価方法についての理解を深めることを目的とする。	
		リーダーシップとコーチング	スポーツに指導のために必要な指導方法とチームを率いるための実践的な統率力を学ぶ。さらに各スポーツ種目別に最適な方法を検証する。	
		情報と社会Ⅱ	この科目は、ここ数十年の間に私たちの仕事や生活並びに社会そのものに大きな変革をもたらし、今後ともどまるところを知らない情報並びに情報技術のしきみや本質を正しく理解するとともに、社会に与える影響について洞察を得ることを目的とする。今日、インターネットは、従来型のメディアを吸収するとともに、単に情報発信だけでなく、SNSなど社会的なつながりを形成するメディアとなり、私たちの思考や行動にさまざまな影響を及ぼしている。本科目では、前期の「情報と社会Ⅰ」で学んだ基礎的な知識をもとに、現実の情報社会における諸事象の背景やしきみ、その光と影、功罪、リスクなどについて多面的に学び、現代の情報社会を生きぬぐ力を養うことができよう。	
	情報リテラシー	目的に応じて情報を主体的に収集・分析・加工・創造・発信することで問題解決を図る能力(情報リテラシー)はどの学問領域においても重要で、大学教育の基礎となるものである。今日の情報化社会において、情報通信技術(ICT)はコミュニケーション手段としてなくてはならないツールで、その活用能力を身に付けることは重要である。一方、ICTを活用していく上で大切な情報モラル、セキュリティ、著作権等の情報倫理についても、きちんと理解させることとする。更に、授業では情報の活用という観点から、様々なデータに隠された真の情報を読みとることの大切さについても学習させる。		
	宇宙と物質	宇宙について人類は各時代に夢を描いてきた。科学が発展するにつれて宇宙の謎はかえって深まり、一般的に物理学の分野で際立って人気がある。宇宙に関する観測技術が驚異的に進歩し、高エネルギー物理学の進展とともに、宇宙の研究はいまや精密科学の領域に入ってきている。宇宙の進化、銀河、天体やまた物質の起源など興味あるテーマを観測事実に基づき科学的思考方法で講義する。これらのテーマはミクロの世界も含めて総合的な把握が要求され、基礎的な部分も必要に応じて学んでいく。		
	環境科学	科学技術の進展に伴い経済を発展させ物質的に豊かな社会を築くことが人類の生存条件をよくすると信じられてきたが、予想に反して人類の生活の場が人類の生存に敵対的になってきている。この負の現象が環境問題であり、現代社会の最重要な課題の一つとなってきている。「環境科学」は自然環境に関する成り立ちや環境問題の発生メカニズムを科学的に理解すると共に各自が得た知識を生かしながら総合的に把握する。現状認識を踏まえて環境保全の実体を分析して環境保全のあるべき姿を模索する。		
	自然科学入門Ⅰ	「自然科学入門Ⅰ」は、物理学・化学・生物学などの自然科学がもっている学問としての性質を理解することを直接的な目的としているが、最終的には、科学的思考法とはどのようなものなのかを身に付けることを目的としている。このような目的を達成するためには、自然科学の成り立ちといった縦断的アプローチや、ある事項を個々の学問から多角的に扱う横断的アプローチ、そしてそれらを織り混ぜた組織的アプローチなどが考えられ、それぞれが実際の講義内容になるであろう。		
	自然科学入門Ⅱ	「自然科学入門Ⅱ」は、物理学・化学・生物学などの自然科学がもっている学問としての性質を理解することを直接的な目的としているが、最終的には、科学的思考法とはどのようなものなのかを身に付けることを目的としている。このような目的を達成するためには、自然科学の成り立ちといった縦断的アプローチや、ある事項を個々の学問から多角的に扱う横断的アプローチ、そしてそれらを織り混ぜた組織的アプローチなどが考えられ、それぞれが実際の講義内容になるであろう。		

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目 選択科目	数学入門Ⅰ		「数学入門Ⅰ」は、ベクトルと行列、ベクトルと行列の役割、連立1次方程式の解法などを主要な学習目標とする。コンピュータのアルゴリズムやプログラミングを作成する上で最低限必要となる論理的な考え方を「正比例」をキーワードにして学ぶ。正比例を一般化した線形性の概念を使って社会科学の分野に現れるさまざまな現象の理解とそれらをモデル化する代表的な方法を修得する。更に、各種の公務員試験や教員試験の問題を取り上げながら「線形数学」の分野の基本事項について実践的に学習する科目である。	
	数学入門Ⅱ		「数学入門Ⅱ」は、無限小の世界における正比例を一般化した「微分」の概念を使って社会科学の分野に現れるさまざまな現象の理解とそれらをモデルとする代表的な方法を習得する。コンピュータのアルゴリズムやプログラミングを作成する上で最低限必要となる論理的な考え方を「連続と無限小」をキーワードにして学ぶ。更に、各種の公務員試験や教員試験の問題を取り上げながら「微分と積分」の分野の基本事項について実践的に学習する科目である。	
	生物学Ⅰ		生物学では、生命体の諸現象(生命現象・遺伝・進化・形態・行動・生態など)を自然科学の手法で分析し、そこから生命体に関する基本的な原理や法則を理解することを目的とする。また、進歩の著しい遺伝子工学の基礎知識として、1. 遺伝現象と遺伝子という発想、2. DNAの構造、3. 発生・行動・進化と遺伝子、4. 遺伝子の利用、について学び、遺伝子に関わる今日の社会的課題にある程度の判断が下せるようになることを目指す。「生物学Ⅰ」ではこの中のいくつかの領域を講義する。	
	生物学Ⅱ		生物学では、生命体の諸現象(生命現象・遺伝・進化・形態・行動・生態など)を自然科学の手法で分析し、そこから生命体に関する基本的な原理や法則を理解することを目的とする。また、進歩の著しい遺伝子工学の基礎知識として、1. 遺伝現象と遺伝子という発想、2. DNAの構造、3. 発生・行動・進化と遺伝子、4. 遺伝子の利用、について学び、遺伝子に関わる今日の社会的課題にある程度の判断が下せるようになることを目指す。「生物学Ⅱ」では「生物学Ⅰ」で扱わなかった領域について講義する。	
	地理学Ⅰ		地理学は自然と人間との関わりを追求する科学である。多様な自然の中で人間がどのように生活しているか？人間は自然をどのように改変してきたか？その歴史は？今は？これらの問いを明らかにするために様々なアプローチが用意されている。「地理学Ⅰ」では、自然と人間との関わりについて理解を深めるための手段のひとつである『地形図(国土交通省国土地理院発行)』の使い方・読み方に関する講義に加え、我々の日常生活に不可欠な『水』に関する講義を行う。地下水や河川水、湖沼のもつ特性と飲料水や産業への利用に伴う様々な環境問題についてその歴史と現状、課題を中心に講義を行う。	
	地理学Ⅱ		地理学は自然と人間との関わりを追求する科学である。多様な自然の中で人間がどのように生活しているか？人間は自然をどのように改変してきたか？その歴史は？今は？これらの問いを明らかにするために様々なアプローチが用意されている。「地理学Ⅱ」では、人間生活の舞台となる大地(『地形』)の成り立ちについて、また我々人間を含めたあらゆる生物を取り巻く『大気』の状況について、主として自然地理学の観点から講義を行う。	
	統計学入門Ⅰ		統計学は文系、理系を問わず非常に応用範囲の広い学問である。「統計学入門Ⅰ・Ⅱ」を通して統計学の入門レベルを概観することになるが、「統計学入門Ⅰ」では、統計学を理解する上で欠くことの出来ない確率が中心的テーマです。日常使われる確率が、数学的にはどのように表現されるのかしっかりと聞いて欲しいと思います。	
	統計学入門Ⅱ		統計学は文系、理系を問わず非常に応用範囲の広い学問である。「統計学入門Ⅰ・Ⅱ」を通して統計学の入門レベルを概観することになるが、特に「統計学入門Ⅱ」では、統計学の中心部にふれるので、自分の専門のどんな所に統計学の応用があるのか常に気をつけてもらいたい。そういうことを考える習慣を身につけてもらいたいと思います。	
	基礎数理Ⅰ		文科系の学生に不足しがちな数理的な基礎知識と論理的な思考方法を学習し、将来専門的な科目を勉強する際に必要とされ、卒業後社会人として必要不可欠でもある「問題分析力」と「最後まで考え抜く力」を遺憾なく発揮できるようにするための基礎を養成する科目である。「基礎数理Ⅰ」では、受講者の多くが数学を苦手としていることを考慮し、入門レベルにおける数学の知識を再確認しながら、数理的な考え方の基本や論理的なものの見方を講義し、基礎的な問題演習を通じてこれら考え方や見方を修得する事ができるよう指導する。	
基礎数理Ⅱ		文科系の学生に不足しがちな数理的な基礎知識と論理的な思考方法を学習し、将来専門的な科目を勉強する際に必要とされ、卒業後社会人として必要不可欠でもある「問題分析力」と「最後まで考え抜く力」を遺憾なく発揮できるようにするための基礎を養成する科目である。「基礎数理Ⅱ」では「基礎数理Ⅰ」と同程度の水準(またはレベル)を前提に、より進んだ内容の修得を目指す。就職試験における数理分野の問題解決能力や各種資格試験及び大学院への進学に際して必要とする数理的素養と論理的思考方法の基礎的な知識と能力を培うことを学習目標とする。		

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学共通科目	選択科目	基礎数理Ⅲ	学問研究においては、論理的思考力が必須である。情報を収集・整理し、これを正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること、また、自分の見解を論理的に述べ、相手の見解を理解した上でこれと議論することは、いかなる学問にも共通するプロセスである。また、人間関係が重視される日常生活でも、論理的思考が重要な場面は多い。職業の場で意思決定が求められても、論理的に思考しなければ正しい決定は下せない。プレゼンテーションの機会が与えられても、論理性に欠けると他者の理解や納得を得ることができないのである。本講義では、このように学問の場でも日常生活においても不可欠とされる論理的な思考力を、各自の能力に応じたクラスに分かれて習得するよう努める。	
		基礎数理Ⅳ	情報通信技術の飛躍的な発達により、学問研究のあり方が大きく変容した。金融・経済、マーケティングなどの分野では、日々刻々と大量のデータが集積されている。法や政治の領域でも、新たな統計法により、公的統計が国民の合理的な意思決定のための基盤となる重要な情報であることを認め、公的統計の体系的整備と統計データの利用促進が図られることとなった。現在社会では、さまざまなデータを解析し利用する能力が不可欠である。そこで、本講義では、社会科学の各分野における事象の数的処理に関する知識と技術を習得させ、これを実際に活用する能力と態度を育成することを目的とする。	
		プログラミング言語Ⅰ	与えられたアプリケーションソフトウェアを操作するだけでは、コンピュータを自由に活用することはできない。コンピュータ上で自分のやりたい事を自分の手で実現するための第一歩としてプログラミングの基礎について学習する。プログラミング言語Ⅰでは汎用プログラミング言語コンパイルシステムを使ってその言語の文法、プログラミング技法、データ処理方法等を中心に学習する。プログラミング言語としては、JAVA、C(C++)言語、アセンブラ(CASLⅡ)、Ruby等を使用する。これらの言語の中からⅠ言語以上を開講する。	
		プログラミング言語Ⅱ	Ⅰで学んだ知識と実習を基盤として、Ⅱではより高度で実践的なプログラミング技術について学習する。Ⅰでは基本的なプログラミングを理解し、実際に自分で入力して実行する過程が中心であったが、Ⅱではプログラミングはもちろんのこと、自分でコーディングに必要な前処理からデバッグまで一人でできるようにすることを目標とする。使用する汎用言語にもよるが概ね多次元配列の処理やデータ処理がプログラミングでき、簡単なエディタ程度のアプリケーションの製作を目標とする。原則として、ⅠとⅡは同一の汎用プログラミング言語を履修する。	
		データサイエンス入門	近年、マーケティング分野や医療分野をはじめとする産業界の多くの分野でデータサイエンスが重要な役割を果たしている。データサイエンスを各分野で効果的に応用するためには、「データの適切な扱いと前処理」、「適切なアルゴリズムの選択」、「結果の適切な解釈」を習得する必要がある。本科目では、データサイエンス分野で広く用いられているプログラミング言語を使用し、実データを使った演習を通じてこれらの内容を習得する。	
		データサイエンス応用プロジェクトⅠ	多くのデータがデジタル化され利用可能になった今日、大量のデータをコンピュータで分析することにより新たな知を発見するデータサイエンスが注目されている。本科目は、実際のデータの取得・分析・活用を体験することにより、数理・データサイエンス・AIの知識を他の分野に応用できるようにすることを目的とするPBL科目である。各クラスの担当教員の専門分野などからクラスごとにテーマを選び、データの可視化や各分野のデータの取得・分析・活用に関する実習を行う。	
		データサイエンス応用プロジェクトⅡ	多くのデータがデジタル化され利用可能になった今日、大量のデータをコンピュータで分析することにより新たな知を発見するデータサイエンスが注目されている。本科目は、実際のデータの取得・分析・活用を体験することにより、数理・データサイエンス・AIの知識を他の分野に応用できるようにすることを目的とするPBL科目である。Ⅱでは、Ⅰに引き続き、各クラスの担当教員の専門分野などからクラスごとにテーマを選び、より高度なデータ分析の手法や機械学習・AIに関するプログラミングなどを実習する。	
		表計算とデータサイエンス	表計算ソフトは、企業において各種集計やグラフ作成などの日常業務に利用されるだけでなく、データサイエンスにおいても基本的な統計分析やより高度な分析のためのデータの準備に活用される基本的なツールとなっている。この科目では、各種集計やグラフ作成などの基本的な利用法から始め、各種データの基本的な統計分析を統計的な背景も含めた上で理解し、表計算ソフトとプログラミングを組み合わせたりより高度な活用方法までを習得することを目的とする。	
		キャリアデザイン	キャリアデザインは、職業を中心とした人生をどのように過ごすかを計画すること、すなわち、これからの時間をどのように過ごすかを考えることである。キャリアデザインでは、将来自分がどのような仕事に就き、どのような人生を送りたいか等、将来の自分のイメージし、その至るプロセスを計画する。また、キャリア形成に必要な二つの柱(内部環境と外部環境)を理解し、併せて社会で求める就職基礎能力とコミュニケーションスキルを高めることを目的とする。	
		キャリアインターンシップ	各学生が実際に企業活動の実体に触れることによって、実社会の諸問題(企業の仕組みや仕事の流れ、就業規則、社会人や企業人としての意識など)を学び、それぞれに職業観・就業観を育成して従来の職業選択や進路決定に役立たせるとともに、その後の大学生活全体の見直しと学業意欲の方向性・専門性(履修科目の体系化など)を見出す動機付けとなることを目的としている。つまり、本講義では、学生の学外研修による体験学習を通じて、各学生の職業意識の形成と大学内での学習効果の向上を期待している。	

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全学 共通 科目	選択 科目			
	総合学術演習Ⅰ		2年次までの学修から得た学問的関心を深化させ、学生自身で調査、考案できるようになることを目指す。内容は教員の専門分野に応じたプログラムを提供する。	
	総合学術演習Ⅱ		3年次までの学修から得た学問的知見を発展させ、4年間の学修の成果となる卒業研究を行なう。内容は教員の専門分野に応じたプログラムを提供する。	